

この素晴らしい世界に殺人貴を！

?~Rea~

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

遠野志貴は大切な人のために命を捨てた。  
はずだったのだけど、気付けば異世界に行ってしまいました。

ルートとしては秋葉ルート終了直後です。

さすがに、やったのが何年も前なのできちんとした設定は覚えてません（泣）まあ、志貴さんちよつとばかりチート化させます。

注意）月姫のクロスオーバーですが、月姫、歌月十夜、AATMアーネンエルベの一日、とクロスさせています。正直、やってない、見えない、聞いていないとわからない話もありますので、わかんねーなこれ、と思ったら飛ばしちゃってください。その辺はやりたいただけですから。

ちなみに、このすばの知識はあるような無いようなです。割と適当なので大目に見てください（）

文章はたまに翡翠ちゃんのようになってますが、大目に見てください（；・・・口・・）

## 目次

異世界へ	1
神さまの言うとおりに	8
生きているのなら神様だつて (ry	14
神さまの言うとおりに2	19
N r v n q s r C h a o s っ て、読めないよね	24
夢というのは甘美で儂いものである	29
デュラハン来る	34
正義の味方 誰の味方？	41
デュラハン来る2	48
夢魔だつてケーキが食べたい	55
どうやら、平行世界の遠野志貴は鬼畜らしい	61
噂の吸血鬼を探しに	66
俺の罪	71
路地裏同盟の下っ端	77
いい人が生きてるか死んでるかなんて関係ない	85
トメイト!!	91
レンと不思議なNECO	96
レンと不思議なNECO2	100
レンと不思議なNECO3	104
スキルを求めて	110
お前ん家、おっぱいやーしきー!	113
男なら、推して知るべし	118

## 異世界へ

「ここはどこだ……?」

あたりを見回してみるが、あたりは真っ暗。ただ、目の前には美少女といつていい女の子が立っていた。

「ようこそ、遠野志貴さん。あなたは先程、亡くなられました」

そう。私(わたくし)こと遠野志貴は、先程自害した。この上ない、大切なもののために。

「知ってるさ。だけど、どうして俺はこうして意識があるんだ?」

死んだものはこうして話したりはできない。それは、世界の常識だ。

「先程も申しましたが、ここは死後の世界。貴方にはこれから、二つの選択肢が与えられます」

「二つ、ねえ……それよりも、アンタ何者だ? なんかこう……」

コロシタイ……

それは、俺の中にある血が疼いている証拠だった。

「私は女神エリス。日本で死んだ方の担当者、と言えばよろしいでしょうか」

女神……ねえ。なるほど、人間でない、というのは合点がいく。さすがに、女神様を殺してしまうと後々面倒なことになるから、どうか正気を保つ。

もう、あの吸血鬼のような厄介事は懲り懲りだ。

「よろしく、女神様。それで、選択肢っていうのは?」

「はい。一つは天国に行く。そして、もう一つは、転生し、魔王を倒し、世界を救うこと、です」

「世界を救う?」

笑わせないでほしい。世界だと?

妹ひとりしっかり救えなかったやつが、世界だと?

だけど……

「いいだろう。世界を救ってやる」

天国なんてもの、俺が行くような場所ではない。普通(しあわせ)な

んていうのは、俺にとってどうしようもなく遠いものだ。

それに、転生だろうとこの姿で生きてさえいれば、あいつらにまた会えるかもしれない。

「……随分と決断が早いんですね。分かりました、それでは転生するにあたっての説明を致しますね。この、転生するというシステムですが、ただ転生しただけでは犬死してしまいます。そのため、転生する方々には特典が与えられます」

「特典？」

「はい。例えば、最強の剣だったり、最強の魔法使いになるだったりです」

「それは便利だな。それっていうのはなんでもいいのか？」

「はい。一応、カタログもありますが、基本何でもいけます」

それは便利だ。

俺は、なんの前触れもなく眼鏡を外す。すると、少し奇妙なことを体感した。

「……どういうことだ」

俺の目は少し特殊で、所謂魔眼というものののだが、どうもそれがおかしい。おかしい、というのも少し変だが、調子が良すぎるのだ。

直死の魔眼、は死を理解する。そのため、脳には膨大な負担がかかるはずなのだが、今それがない。

「遠野さんの魔眼のことですか？」

「……ああ。これはどういう事なんだ？ あんた、わかるのか？」

「はい。予想ですが、貴方は1度死にました。しかし、貴方は秋葉という人間の体よって生き返った。その時、貴方は中途半端に死を理解してしまっていたんです。ですが、今回は完全なる死。それならば、死を理解するというのは、貴方にとっては簡単なことなのでしょう」

なるほど。死んだことよって魔眼が消えていると思っていたけれど、むしろ強化されているとは思わなかった。

完全なる死を迎えた俺の体はさらに一つだけ特典を得ていた。

虚弱体質の無効。

これは、俺が秋葉につき止めてもらっていたため、虚弱体質に

なっていたものだが、完全に繋がりが切れた今、それはなくなっていた。

あいつは、もう無理をすることは無い。俺なんかのために不幸になる必要なんてない。あれからどうなったかなんて分からないけれど、琥珀さんと翡翠がついてる。きつとうまくやっていっているはずだ。

「どうしたんですか？」

「いや、何でもない」

そんなことは今考えていても仕方が無い。

「それで、特典だったな」

「はい。最強の剣、最強の魔法。なんでも揃ってますよ！」

「そうだな。これといって欲しいものは……」

最強の剣は必要ない。体術も必要ない。なにか欲しいもの……

「なあ、それって体質を治せたりもするのかわ？」

「ええ、まあ。どのような体質を治したいんですか？」

「まあ、殺人衝動だよ。ほら、七夜の血がね……この先、人間以外がわんさかいるところに行くんだ。身が持たない……」

もし、そこに人間以外の種族があるなら、皆殺しにしかねない。それこそ、本当に殺人貴だ。さすがに、このルートでこのフリーズは使われたくない。

「そういう事ですか。それなら可能ですが、それだけだと何だか味気ないですね。どうせですから、七夜の体術もおまけしちやいます」

それでいいのか女神様。そうして貰えるのは嬉しいことではあるけれど……

「ぶつちやけ、七夜のころの記憶を戻すだけですけどね」

女神様は何か呟いたようだけど、聞こえなかった。

「それでは遠野志貴さん。あなたをこれから異世界に送ります。魔王討伐のための勇者候補の一人として。魔王を倒した暁には神々からの褒美として、どんな願いでも一つだけ叶えてさしあげます」

「どんな願いでも……？」

「はい」

俺には願いなんてひとつしかない。待たせている人がいるんだ。

待っていてくれよ……

秋葉……

「ここが異世界か。確かに、凄いな……」

それもそのはず。気がつくと、目の前には水色の髪をした少女が粘液まみれになって少年の後をついて行っているのだから……

「いやっ！ これは違うんです！ こいつがジャイアントトードに食われただけでッ！」

俺の冷たい目を感じたのか、少年は弁論を始めた。

「うぐっ……かじゆまが…… かじゆまが私を……汚した……」

うわあ……なんていうかいたたまれない……

「ちっがーう！ ていうか、その格好、あなたも転生者ですか？」

俺が着ていたのは、学ランだった。死んだ時はTシャツだったはずなんだけどなあ……

「ということは、君も転生者か。まだこっちに来たばかりなんだ。どうしたらいいかわかるかな？」

「とりあえず、向こうにあるギルドに行つて、冒険者登録をしたらいいと思います」

そういつて、少年は建物を指さす。

「ありがとう、助かるよ」

「同じ冒険者ですからね。あ、それとこれ」

少年は、何かが入っている袋を渡してくる。

「これは？」

「千エリスです。ああ、エリスっていうのはこっちのお金なんですけど、登録料いるんですよ。持ってないですよね？」

「確かに持ってないな。何から何までなんか、悪いな……」

しかし、登録料？ なんだそれ？ 冒険者になるだけで金をとるのか？

「いいんですよ。転生者どうし、持ちつ持たれつです。じゃあ、あのバカを風呂にぶち込んでくるのでこれで」

情けは人の為ならずとはいうが、なんとという、好少年だろう。性癖がどうかは置いておいて……

とりあえず、俺はギルドと呼ばれる場所に向かうことにした。

「ここがギルドか。なんていうか騒がしいな……」

まだ日も落ちてないのに、そこは相当賑わっていた。こんな時間から酒を飲んでいる人もチラホラいる。

「いらっしやいませー。お食事ですか？」

「いや、冒険者の登録をしたんですけど……」

「それでしたら、あちらのカウンターに行ってくださいー！」

俺は言われた通り、奥に移動する。

「冒険者登録をしたのですが……」

「冒険者登録ですね、登録料千エリスになりますが、宜しいですか？」

「これをお願いします」

「承りました。それでは、この紙に名前を記入してください」

「遠野志貴さんですね。それでは、これに手を触れてください」

「……凄いですね。幸運、魔力以外の全てのステータスが平均を上回っています。特に、体術は群を抜いています。これなら、プリーストやウィザード以外の殆どの職業につけますよ」

職業か……それについては何も考えてなかった。体術のステータスが高いのは七夜の体術のせいなのだろうか……？

「その、短剣で戦う職業っていうのはどれになるんですかね？」

俺の戦闘スタイルは、短刀によるものだ。ここで、武器をチェンジするのも手だとは思いますが、使い慣れたものを使うのが一番だろう。

「それでしたら、アサシンなんていうのはどうでしょう。これは、盗賊の上位職の一つですが、その名の通り暗殺者。短剣による攻撃に優れており、単体行動に特化しています。もちろん、パーティの不意打ち要員としても人気ですね」

「そうですね。それじゃあ、このアサシンをお願いします」



さてと、これからどうしたものか。冒険者になつたものの、武器がない。七つ夜の短刀は向こう側に置いてきた。何か、こう切れるものが欲しい。この際、ハサミでもなんでもいい。

だが、現在の所持金はゼロ。何も買えないという現実が俺の財布に突き刺さる。こうなったら、バイトでも探すか？　こんな街だ。アルバイトの一つや二つ、探せば見つかるだろう。

しかし、冒険者になつてそうそうアルバイトか……ファンタジー感も台無しである。

「おや、困り事？」

「ええ、まあ。君は……」

「あたしはクリス。盗賊をやつてるんだ」

「さつきぶりはです、エリモゴ……」

口を塞がれる。

「あたしはクリスだつてば。それで、剣がなくて困つてるでしょ？」

私のお古で良ければこれ、あげるよ。それじゃあね」

クリスと名乗つた女神様は俺のポケットに短剣をいれ、颯爽と去つていった。

しかし、あれは女神様だ。どういうわけか分からないが、姿は少し違うようだったが、気配は変わらない。どうやら、七夜の殺人衝動は抑えることは出来るが、相手の気配、つまりその人が人かそう出ないものかが分かるらしい。

女神様の気配は神聖なもののように感じる。今でこそ、殺したいなんて思わないけれど、あれはあれで異常だ。

「結局、何も聞けず終いか……とりあえず、これにでもいつてみるか」  
クエスト掲示板に貼つてある紙を一枚取り、受付に渡す。

内容は3日以内にジャイアントトード5匹の討伐。たしかさつき  
の少年もジャイアントトードつて言つていた気がする。あの得体の  
知れない粘液まみれの少女を見る限りは注意した方がいいだろう。

とりあえず、俺は街の外に出る。

「なるほど。巨大なカエル……ねえ」

思わずため息が出る。

「デカイにも程があるだろ。なにか？　この世界っていうのは常識の範疇ってものを知らないのか？」

自分や妹、知り合いの吸血鬼を柵に上げて、散々言ってみる。

「まあ、やるしかないか」

眼鏡を外し、カエルを見る。いや、視る。

「まあ、巨大ってただけだよな……」

その日、俺は10匹のジャイアントトードを討伐し、それなりに報酬をもらうこととなり、それなりの宿に泊まることにした。

ちなみに、カエルの肉はなかなか美味しかった。鶏肉に似ているんだな、あれ。この世界にいと、ゲテモノでもなんでも食べられるようになりそうな自分が少し怖かった。

## 神さまの言うとおりに

時は流れ、翌日。

「うーん……この格好は少し目立つな……」

なにせ、異世界に学ランだ。目立たないわけがなかった。

「俗世に塗れる、という訳じゃないけど、郷に入っては郷に従え、だ。なにか服を探すか……」

とりあえず、昨日のクエストのおかげでお金に関しては問題はない。生活必需品を得るため、街に出て買い物をすることにした。

ということで、始まりの街アクセルを探索。服を適当に見繕う。

アーマーなんていうものも憧れるけど、俺の場合は動きやすさ重視だ。七夜の体術は実感はないが使えるようになってはいるはずだけだ。俺の専門は暗殺だ。動く際に音をたてないものがない。そうなるのと、もちろん金属系の装備は不要。マント系の類も必要ない。

俺の要求に答えた服装は日本における忍者服のようなものだった。まあ、異世界補正か服にはいろんな布が追加されていて、いかにもファンタジーというものだった。

服を買い終えた俺は、ギルドに向かう。もちろん、昼食をとるため。

「お、良かった。少しいいかな?」

「あなたは昨日の……」

「自己紹介がまだだったね。俺は遠野志貴だ。志貴でいい」

「佐藤和真です。そんじや、こつちもカズマで。で、どうしたんですか?」

「ああ、これを渡そうと思ってね」

どん、と机の上に袋を置く。中には1万エリス。昨日借りたのは千エリス。お返しとしては十分なはずだ。

「昨日のお礼、というか昨日のお返しだ。君たちにとっては端金かもしれないけど、受け取ってほしい」

「……神かつ!?!」

何を言っているんだ……?!

「なにになにつ?!? どうしたの!?! って、お金っ?!? ウエイターさん

シユワシユワ3つ!!」

どこからともなく水色の少女が現れ、袋の中を確認すると、注文をする。3つって俺の分も入っているのか？

「おいてみてっ!! なんで金が入った瞬間使ってたんだよっ!!」

「えー、いいじゃない! ねえ、いいわよね?」

「まあ、もう渡したものだからどう使おうがそちらの勝手だと思うが……」

なんていうか、この少女。どつかのアーパー吸血鬼みたいだな。

「それで、そっちは?」

「私? 聞いて驚き、ひれ伏しなさい!! 私はアクア、女神よ!」

「ふうん。女神ねえ。俺は遠野志貴だ。志貴でいい」

さつきからアクアと名乗った少女が放っている気配がエリス様に似ているという理由がわかった気がする。

まあ、こっちはなんだか哀れだな……

「あれ、志貴さんは信じるんですか?」

「俺が転生者つてことを除けば、まあ信じないな」

「どう? カズマ。私つてすごいのよ?」

「いや、全くすごいか、そんな関係ないと思うぞ?」

アクアは周りからは、かわいそうなものを見る目で見られている。普通ならそうなるよな。

「それじゃ、ご馳走様でした。俺はこれで失礼するよ」

昼食を終え、その場をたつ。

「さてと、体でも動かすか……」

やる事が無かったのだ。まだ街を見て回っても良かったのだけど、特に欲しいものは無い。俺の場合、必要最低限のものがあれば問題は無い。

そういうわけで、運動がてらくエストを受ける。内容は昨日と同じものだ。

街を出て、しばらくカエル狩っていると、豪音が聞こえた。どう考えても、これは爆発音だ。

事件か……? それとも事故? どちらにしろ、ただ事ではない音

だった。

「何をやってるんだ……君たち……」

音がした方に行ってみると、そこに居たのはカエルと戯れる人間。近くには隕石が落ちたかのようなクレーターができていた。

「し、志貴さああん！ 助けてくださいいいいいい！」

カエルに追われるカズマ君は必死の形相で俺に向かって全力疾走してくる。

これは、さすがに見逃すことは出来ないだろう。

「……分かった。そのまま、俺の後ろに」

眼鏡を外し、ナイフを抜く。

「さて、料理の時間といこうか」

向かってきたカエルを17分割する。

「すげえ……」

「それで、さっきの音は一体……？」

「それなら、アレのせいです」

カズマ君はやる気のない目でカエルを指さす。

「ん？ カエル……って人が食べられてるっ!？」

数匹いるカエル。その中に、口から人の脚を出しているカエルを2匹見つけた。

「いいんですよ。あんなバカどもは放って起きましょう」

「いやいやいや、流星にそれはまずいだろう」

ナイフを抜き、腰を低くする。

『閃走・水月』

地面を思いつきり蹴り、カエルの背後に移動する。

その速度はさながら、瞬間移動だった。

「……っ!?! いくら何でも、強化されすぎだろ……」

そんなことを呟きながら、カエルを殺し、食べられそうになっていた二人を助ける。

1人はかわいそうな女神こと、アクア。もう1人は知らないな……  
「カエルのなかってあったかいんですね……知らない知識が増えました……」

その赤いマントを羽織った少女は地面に突っ伏したままだったが、どこか満足気に見えた。

「えつと……君は……？」

「我が名はめぐみん、アークウイザードを生業とし、最強の攻撃魔法、爆裂魔法を操る者！」

「そういう夢でも見たのかな？」

カエルに食べられそうになった恐怖で頭がやられたのか……？  
なんとという酷いことを……

「ち、違わいつ！ これを見よつ！」

提示してくるのは、冒険者カード。

そこにはしつかりと、めぐみんという名と、職業がアークウイザードであるということがしつかりと記載されていた。

「なんか、ごめん……」

「なんですか!? なんなのですか!? なにか、おかしい所がありませんか!? 聞こうじゃありませんか!!」

なんか、すつごい突つかかってくる。

「かじゅまあ……また汚されちゃったよお……」

「寄るな、駄女神！ 服が汚れるだろうがっ!!」

なるほど。昨日のあの粘液は何かと考えていたが、そういう事だったのか。つまるところ、今日は昨日と同じ状況だったということだ。

「それじゃ、俺はこれで……」

「志貴さあああああん!」

カズマ君の悲鳴のような叫び声を聞かながら俺はその場を去った。この場にははまずい。俺の中の本能がそう呼びかけていた。どこの正義の味方なら助けていたのだろうけど、俺はそうもいかないというわけだ。

「あ、いた!!」

翌日、ギルドで朝食をとっていると、ドンツ、とテーブルを叩かれる。

「どうしたんだ、女神様。俺はこう見えて忙しいんだが」

「どう見ても、忙しくないでしょ！ それより、貴方。私達のパーティーに入らない？」

全く早急だ。

「アクア達のパーティー？ お誘いはありがたいけど、断らせてもらうよ」

「え？ どうして？」

「どうしてもこうしても、俺はアサシンだ。その名の通り、暗殺者。不意打ち専門だから、団体行動は苦手なんだよ」

尤もらしい言い訳を述べる。このパーティーはやばい。このパーティーはやめた方がいいと直感がそう教えている。

「えー、いいじゃん、そんな事言わずにさあ」

わかつてはいたが、アクアは食い下がってくる。

どうすれば、断ることが出来るのだろうか……このタイプはあれだ。こちらが首を縦にふらない限り、離してはくれないだろう。

そんなことを考えていると、扉からカズマとクリス、金髪少女が入ってきた。

「あれ、志貴？」

「エ……クリスか？ どうしたんだ、そんな涙目で」

「うむ、彼女はカズマに盗賊のスキルを教える際に、パンツを剥がれたうえに、有り金全てをむしり取られて、落ち込んでいるだけだ」

金髪少女の説明から考えるに、カズマ君はただの犯罪者になったらしい。

「財布返すだけじゃダメだって……じゃあ、いくらでも払うからパンツ返して頼んだら、自分のパンツの値段は自分で決めろって……」  
「おい、待て！ ちょっとまってっ!! 間違っただけで、ほんと待って！」

間違っただけなのか……？

「さもないと、このパンツはもれなく我が家の家宝として、奉られることになるって……」

「カズマ君、警察に行こうか」

カズマ君の肩をポンと叩き、ニツコリと微笑んでみる。

「待つてくださいい、志貴さん!! 冗談ですよねっ!?!」

「俺は冗談は嫌いだよ」

とりあえず、犯罪者を警察に引渡しに行くか……

「志貴、ちよつといいかな?」

そんなことを考えていると、クリスからお声がかかった。

「ああ、どうしたんだ?」

「こつちじゃ話しづらいから、あつちに」

クリスはカウンターの方を指さす。

「これは、命令じゃなくてお願いなんだけど、先輩のパーティーに入つてくれない?」

「俺が?」

「うん。先輩の動向がちよつと不安でさ。流石に何かやらかすとは思えないんだけど……」

何となく、クリスの心配はわかる気がする。

「こちらとしては、今はなんのお礼もできないですけど……でも、頼れるのは志貴さんくらいしかいなくて……」

俯き、エリスを出してくるクリス。なんか、ずるいと思う。

「はあ……分かったよ。お礼はしっかりと貰うからな……ほら、戻るぞ」

カズマ君たちのところに戻ると、そこは修羅場と化していた。

「これはどういうことなんだ……?」

戻ってみたら、カズマの手には黒い布。それを、ブンブンと振り回している。めぐみんの様子からみて、めぐみんのものらしい。

「カズマ君、やっぱり一回警察にいきこうか」

俺の異世界生活は前途多難らしい……



生きているのなら神様だつて（ry

ギルド内

「自己紹介をしておこう。ダクネス、クルセイダーだ。今日からカズマのパーティーにお世話になることとなった」

「どうやら、金髪少女は今日からパーティーの一員になっていたらしい。カズマ君の様子を見るに、渋々パーティーに入れたようだ。」

「遠野志貴。アサシンだ」

「アサシンというのはあれか！ 背後から迫り、相手を吊るし、拷問するのだろうっ!?!」

「なぜそうなるっ!?!」

「どこからそういう発想になるんだ？ 発想がぶつ飛びすぎだ……」

「ていうか、鼻息が荒いぞ……？ 大丈夫なのか、この子……」

「志貴さん志貴さん、そいつ、極度のMですよ」

カズマ君が耳打ちしてくる。

「なるほど、類は友を呼ぶという訳か……」

俺は深いため息をつく。

「おい、どういう事だっ!?! よし、聞こうじゃないか!!」

「どうもこうもそういう事だろう。他に理由があるだろうか。」

カズマ君は多分、紛いもない変態で間違いはないだろう。さっきのパンツ事件がそれを証明している。アクアもめぐみんもダクネスも、なるべくして仲間になったのだろう。

ん？ 俺？ ほら、俺は監視役だから除外だ。

「待ってください、志貴。私とカズマを一緒にしないでください。私に変態にジョブチェンジした覚えはありませんよ?」

「そうよ！ こんなヒキニートなんかと一緒にしないでちょうだいっ!」

哀れ、カズマ。なんか全否定されている……

「おい、そー！ 聞こえてるぞー!」

カズマは席を立ち、女子二人を勢いよく指さす。

「なんですか？ 開き直りがあるなら聞こうじゃありませんか。ほ

ら、言ってみてくださいよ。女の子2人からパンツを剥ぎ取った今の気分はどうですか?」

「ほんつとに、すみませんっした!」

Oh……Japanese DOGEZA……

「あはは……綺麗な土下座だね……」

クリスは若干引いているようだ。俺も引いている。

「いや、でもステイルって相手の持ち物からランダムにものを奪い取るんだろ? これは事故だろ?」

「ま、まあ……本当はそうなんだけど、君の場合は悪意しか感じないというか……」

クリスはジト目でカズマ君を見る。

「そういえば、そのスキルっていうのか? どうやって覚えたらいいんだ?」

「えっ……? 志貴、スキル覚えてないの?」

「ああ、冒険者としての知識はゼロに近いからな、俺」

説明は受けた気がするけど、ほとんど実践していないのが事実だ。

「ちよつと待った。って言うことは、貴方、カエルをスキルもなしにあらんなにしてたわけ?」

「そういうことになるな」

アクアの問に答える。

「スキルなら、冒険者カードに表記されているはずですよ」

「カードに書いてあるのか……」

めぐみんの教えに、カードを見る。そういえば、しっかりとカードを見たことがなかったのを思い出す。

カードには――

短剣 Lv1

直感 Lv1

気配遮断 Lv1

直死の魔眼 LvMax

七夜体術 LvMax

確かに書いてあるな。しかし、最初からレベルがマックスになって

あるんだが……

「どうしたんですか？ 私たちにも見せてくださいよ……って何ですかこれっ!? ほんとに人間なんですか、志貴?」

「どれどれー? って、嘘でしょ……? どこかのヒキニートなんか比べ物にならないじゃない!!」

なかなかひどい言われようである。しかし、カズマくんもなかなかの言われようだ。

「だから、誰がヒキニートだっ!! ってか、そんなに凄いのか、志貴さん……って、うおっ!? まじか……それって志貴さんの特典だったりするの?」

「特典? ああ、あれなら厄介な体質を少しばかり常人にしてもらっただけだよ」

体質を常人にしてもらったことで、人外に違和感は覚えるものの、殺人衝動は起きていない。いつも気をはらなくていいって言うのはいいな……

「はあ? 貴方、特典をそんな下らないことに使ったの?」

「まあ、かなり厄介だったからな。あの体質があつたら、アクア。多分俺は君を殺してる」

「あはは……なんの冗談?」

アクアは苦笑いをする。

「割と冗談じゃない。丁度いいか。同じパーティーになったことだし、俺の目について話しておくか」

「目?」

「そう、目だ。この目はいわゆる魔眼でね」

俺は眼鏡を外す。

「魔眼? なんだそれ?」

「カズマの世界で言うなら、写輪眼とか白眼のことね。何かしらの力が宿った目のことを言うのよ。それで、なんの能力があるの?」

「人の死を視る脳力だ。直死の魔眼って言われている」

俺は正直に答える。別に嘘をつく必要は無い。

「人の死? それって死神の目か?」

「悪いけど、その目の能力は聞いたことがないかな」

死神の目というのは、アルクエイドからは聞いたことがない。特殊なものでもなさそうだけれど……

「死神の目はその人の寿命を見ることが出来る目のことだ。まあ、アニメでしか出てこないんだけどな」

なるほど、アニメか。そういうのって家じゃ見られなかったからなあ……

「なるほど。俺の目は人や物に線や点が視えるんだ」

「線や点?」

「ああ、実際に見てもらった方が早いな」

そばにあった椅子にナイフを入れる。それは、豆腐のように、簡単に切れ、バラバラと音を立てて、崩れた。

「……どういうこと?」

「視えている線を切っただけだよ」

それが直死の魔眼の能力だ。これが、死を視るということ。

「なにそれ、ただのチートじゃない……」

「いや、アクア。それ、一定の冒険者は持つてるんだろ……?」

転生者は少なからず持つているはずだ。そういえば、カズマ君の特典はなんなのだろうか……?

「そんなの、比較にならないわよ。制限とかないわけ?」

「前まではあったんだけど、死んだ時になくなったよ」

「ますますチートじゃない……」

アクアはため息をつく。

「で、だ。俺の元々の体質だけど、鬼だとか、悪魔、吸血鬼みたいな人外のものを見ると殺したくなる殺人衝動っていうのがあった」

「えっと……それってつまり……」

「アクアにも有効だったという事だ。その体質のせいで何人が殺しているしな……」

「流石、志貴ねっ!! いい特典を選んだじゃない!!」

アクアは汗ダラダラになりながら、親指を立てる。

「ところでその線は私にもあるのかっ!?!」

今まで黙っていたダクネスは興味津々に聞いてくる。

「あるにはあるが……」

「いや、ダクネス。割と取り返しがつかなくなるから、切ってもらおうとか考えるなよ？ 死体の処理がめんどくさいから」

「私の死体をどうするつもりだ、カズマツ!!」

ナイスフォローだ、カズマ君。にしても俺、ダクネスは少し苦手かもしれない。

「ところでカズマ。さつきから話している特典というのはなんですか？」

「ああ、何でもねーよ。つまり、志貴さんが魔眼持ちだったことだ」

「それはさっきの話聞いていたらわかります。やはり、カズマはアホなんですネ」

「誰がアホだっ！ このロリっ子！」

「なっ……この私がロリっ子……」

めぐみんは目に見えて落ち込んでいる。結構外見にコンプレックスがあるらしい。

『緊急クエスト！ 緊急クエスト！ 冒険者各員は至急正門に集まってください！ 繰り返しします、冒険者各員は至急正門に集まってください！』

突如として、放送が街中に響き渡った。

## 神さまの言うとおりに2

キャベツ狩りは終わった。メタい話、俺がただキャベツを切る話なので、何も面白くない。

というわけで、キャベツで100万稼いだカズマ君は、借金まみれの女神様にお金をせびられている。その女神様は、キャベツではなく相場の安いレタスの討伐が多かったようである。

どういうことなのかは分からないが、カズマ君は仕方なくお金を渡している。

しかし、カズマ君の性格なら絶対に渡さないと思うのだけど……  
なにか恐喝でもされたのだろうか？

「それで、志貴さんはどれだけ稼いだんですか？」

「ああ、俺はこれだけだよ」

指を3本立てる。

「300？」

「そういう事だ。どうも、俺もレタスが多かつたらしくてね」

実際は300。しかし、ここは黙っておく。どこかの駄女神が俺にまでせびってくる可能さえあるためだ。

「それより、よくアクアにお金を渡したね。カズマ君のことだから渡さないと思っただけだよ」

「そうなんですよ……あいつに弱みを握られちゃって……」

カズマくんはため息をつく。

「弱み？」

「聞かないでください……俺はただ正常な、健全な男子高校生ですからっ!!」

言っている意味がわからない……

翌日。

カズマはギルドにファンタジーにぴったりの服を来てきた。

「ちゃんとした冒険者に見えるのです」

めぐみんの言う通り、緑色のマントはそれなりに冒険者に見えなく

もない。

「ジャージのままじゃファンタジー感ぶち壊しだな」

「確かに。俺も学ランのままじゃ落ち着かなかったからわかるよ」

「ふあんたじーかん？」

ダクネスはファンタジーという単語に疑問を浮かべているようだが、ややこしくなるため無視する。

「では早速討伐に行きましょう！ 雑魚モンスターがいるやつです！

新調した杖の威力を試すのです」

めぐみんはピカピカの杖を振りかざす。どこか息が荒いのは放っておこう。

「いや、一撃が重くて気持ちいい凄強いモンスターを」

気持ちいい……？ 言っている意味がわからない。

「いえ、お金になるクエストをやりましょう！ ツケを払ったから今日のご飯代も無いの！」

駄女神様は特に変わりはないようだ。

「高難易度クエストしかないぞ……？」

クエスト掲示板を見るが、変態共の要望に答えられるクエストは見つからなかった。

「申し訳ありません。最近魔王の幹部らしき者が街の近くの古城に住みつきまして……その影響が弱いモンスターは隠れてしまい仕事が激減しております……」

受付のお姉さん曰く、とのこと。

それから、クエストを受けるということはなく、カズマとめぐみんは毎日どこかに行つては、めぐみんがへばつて街に帰ってくる。あの様子を見ると、爆裂魔法でも撃っているのだろう。

アクアはアルバイト。ダクネスは実家に帰るといった具合に、俺は現在1人である。

別にぼっちという訳では無い。

「しかし、どうするかねえ……」

ギルドのテーブルに肩肘をつき、ため息をつく。

1人で高難度のクエストに行つても多分問題ないとは思いますが、パー

ティーマンバー、特にダクネス当たりから何を言われるかわからない。

アルバイト……も、特にやる必要は無い。現時点で、生活費もろもろは稼いでいる。あるに越した事はないが、別に今する必要も無い。

「やあ、志貴。一杯どう？」

「クリスカ。こんな真昼間から酒を飲むのか？」

それでいいのか、女神様。

「ま、そう言わずにさ！ ウエイターさん、シユワシユワ2つ！」

「で、何か用事があったんじゃないか？」

「流石、志貴。勘がいいんだね」

「勘も何も、女神様が俺に直々に声かけてきたんだ。他に何かがあるんだ」

これが、ただの女の子ならば期待したかもしれないけど、相手は女神だ。そういうことを期待する方が間違っている。

「それもそうか。ま、大したことじゃないんだけどね。この街の魔道具屋には行ってみた？」

「魔道具？ 確か街を散策してる時にそれっぽいのは聞いたことがある気がする」

確か、売れば売るほど赤字になるだとか、万年貧乏の主がいるとか、意味のわからない噂を聞いた気がする。

「そう、それ。一回行ってみてもいいんじゃない？ もしかしたら、魔王軍幹部の情報が手に入るかもよ？」

女神様の助言だ。なにかあるに違いないのは分かる。しかし——  
「しかし、解せないな。どうして、俺にそんなことを教える？」

別に助言をするのは俺でなくてもいいはずだ。それなのに、なぜこの女神様は俺を擁護する？

「そうだね。それは君がイレギュラーだからだよ」

「イレギュラー？」

「そう。本来、私の担当っていうのは……あ、女神としてのね？ で、担当がこの異世界なんだけど、志貴は私の元に来た。本当なら、志貴の世界担当がいるはずなのにね。多分、上の手違いだろうけど、運命



を感じちやつたから……って言ったらどうします?」

クリスは頬を少し朱に染め、恥ずかしそうにそういった。

「は……?」

もちろん、俺は固まる。何を言っているんだこの女神様は……

「冗談冗談。ちよつとからかってみただけだよ。君が私の正体を知っているということ。これだけで十分なんじゃないかな?」

「それもそうか」

事実、そうなのだろう。多分、クリスはこの世界でエリスだということはバレていない。そもそも、自分をエリスと公言する女神はいないだろうし、いたとしても、似ている女の子で終わる。

どこかの馬鹿な女神は自分を女神だということを公言しているが、信じてもらえず、かわいそうな目で見られている、というのがいい例である。

「それじゃ、私は私でやることがあるから行くね。またねー」

「ああ、ご馳走様。それと、ナイフありがとう。お礼を言いそびれていた」

「いいいいいよ。どこにでもあるナイフだからさ」

クリスが店を出ていったのを見届け、俺も腰を上げる。

「魔道具屋か……行ってみる価値はありそうだな」

ということ、街を移動。

「あ、志貴!! 丁度いいところに来たわねっ!!」

移動中、会いたくないやつに出会ってしまった。

「アクアか。どうしたんだ?」

「これ、買っていきなさい!!」

差し出したるは、浅緑の緑玉である。

「断る」

「どうしてよお!! 私のお給料に関わるのよ!? 一つくらい買っ  
ていきなさいよー!」

そんなことだろうと思っただけど、理不尽だ。

「知るか! 大体、これキャベツだぞ? ここで買ったとして、どうし  
ろって言うんだよ?」

「そういわずに一つだけでもお願いよおおっ!!」

アクアは去ろうとする俺の足にしがみつく。どれだけ足を振るっても、アクアは剥がれようとしめない。

「ああもう、わかったわかった! お前に買ってやるから、あとは煮るなり焼くなり勝手にしろっ!!」

「まいどありっ!」

俺は一つだけ疑問に思ったことがある。

本当に殺人衝動を手放してよかったのだろうか?

あの特異な体質があれば、目の前が真っ暗になった後に駄女神は天使になっていたはずだ。

ほら、目の前が真っ暗になった後、人が死んでるなんてよくあることだろ……?

ない……?

そんな下らないことを考えながらも、例の魔道具屋に到着する。

しかし、こんな所に魔王軍幹部の情報があるのだろうか。クリスの言うことを疑うという訳では無いが、始まりの街といわれるアクセルの魔道具屋だ。そんなところに、情報があるとは思えない。

「……考えていても仕方が無いか」

俺は店に入ることにした。

# N r v n q s r   C h a o s つて、読めないよね

「いらっしやいませ、お客様。今日はどのようなご要件で……っ!?」  
奥からマントを羽織った大男が出てくる。何故か、マントの中に服を着ていない。

変態ばかりの異世界だ。こんなのはもう慣れた。

「特に探し物はないんですが……どうかしたんですか?」

店員は俺を睨みつけてきている。

俺、この人になにかしたか……?   冷やかに来たのを怒っているのか……?

「遠野志貴……貴様、なぜお前がこちら側にいる?」

「えつと……どこか出会ったことがありますか……?」

「忘れたとは言わせん。なんせ、この私を殺したのは貴様なのだからな」

店員から溢れ出ているのは殺気。これほどの殺気を感じるのは、こちらに来てから初めてだ。

俺は咄嗟に眼鏡を外し、ナイフを構える。

「どういうことだ……?」

俺は目の前のヒトを殺してはいない。殺したことがあるのは、自身。それと、俺のことを特別だと言ってくれたあの子だ……

「どうもこうもあるまい。日本で、真祖の姫君と共に戦ったのは貴様であろう?」

「真祖の姫君?   誰だそれ。それに、俺はお前と戦った記憶はないんだが……?」

全く記憶にない。あれか?   俺が記憶に無いだけで、実はいろんな戦いをしていたりするのかな?   夜な夜な、本当に人を殺していたのか?

それはない。何故って、シエル先輩が教えてくれたじゃないか。俺は殺人鬼なんかじゃないって……

「なに……?」   小僧、アルクエイド・ブリュンスタッドという名に心当たりはあるか?」

大男から視線を外さず、首を横に振る。

「ふむ、実に面白いではないか。まさか、このような現象が起きようとはな」

急に、店内に充満していた殺気が引いていくのがわかった。

「すまない。私の知っているのは遠野志貴であるが、小僧ではないようだ」

「俺であつて俺でない?」

矛盾している。俺の中にいた……いや、過去の俺ならば、たしかに俺であつて俺じゃない。だけど、それはこの直死の魔眼がこの目に宿る前のことだ。こんな化け物、どうにかなつたなど、考えることすら馬鹿らしい。

「つまるるところ、平行世界という事だ。貴様が記憶をなくしている、という可能性も考えられなくはないが、考えにくいだろう。平行世界とは、貴様が歩んだかもしれない可能性、その世界だ」

おかしなことを言う。

「そんな世界、ある訳……」

「そこを否定するか。それならば、この世界を貴様はどう説明する? 有り得ないことが起こっているのだ。そも、我らが使徒二十七祖には平行世界を行き来する化物もいる」

聞き慣れない単語はあるが、無視する。

しかし、平行世界を行き来できる人物がいるのか……俺の世界は一体どうなっているんだ……?」

「ということは、その世界の俺はアンタを殺したと……?」

「そういう事だ」

「それじゃあ、アンタは俺を殺すのか?」

違う世界とはいえ、俺がこの人を殺したことには変わりない。俺自身に殺意があるのは変わらないだろう。

「ふむ、ふむふむ。これは面白い質問だ。確かに私は遠野志貴という人間に少なからずは恨みがある。しかし、小僧、貴様という人間には興味はあれど、殺意はない。貴様とアレは別の人間なのだからな」

「……難しいな」

まるで、どこかの学校の教授のような言い分だ。俺には理解しかねる。

向こうから完全に敵意が消えたことを確認すると、ナイフをしまい、眼鏡をかける。

「ともあれ、すまないな。貴様に殺意を向けたこと、詫びよう」

本人が納得しているなら、それでいいのだろう。俺がどうこういう権利なんてない。

「それで、あなたがこの店主なんですか？」

「それは否だ。店主は今、商品の買出しに赴いている。名はネロ・カオス。こここの雇われた店員だ。それにしても面白いな。私が敵でないことを知るやいなや、敬語か」

「そうりやあ、そうでしょう。最低限の敬意は示します。それと、既に知っているかも知れないけど、遠野志貴です。宜しくお願いします」  
「うむ。そして、本日の要件は？」

やっと本題である。

「ああ、ここにくれば魔王軍幹部の情報が貰えるって聞いたんですけど、なにか知りませんか？」

「私は知らない。恐らく、情報を持っているのは店主だろう。私はこちらに来てからまで日が浅いのでな」

やはりそうか。この店主は女だと聞いていたから、期待はしていなかった。

「そうなんですけどね……失礼かも知れませんが、ネロさん……」

「やはり気づくか。私は吸血鬼、死徒だ。向こうにいた頃は、真祖の姫君に食人鬼なんて言われていたがね」

「吸血鬼?!」

人間でないことはネロさんに対面した時からわかっていた。アクア達のように神聖なものでなく、邪悪なものだということも……

「まあ、安心するがいい。こちらの世界とあちらの世界では吸血鬼の概念自体が違うようだな。人の血は飲まん」

それを聞いて安心する。もし人の血を飲んでいたら、この場で切り伏せるつもりだったが、その心配は無駄だったようだ。

「鼻が良すぎるといいうのも考えものだな、遠野志貴よ。確かに、私は悪であるが、誰にとつてもそれが悪であるという保証はない。戦闘の準備をするのはいいが、敵意は抑えておけ」

「す、すみません……」

思惑はバレてしまっていたらしい。こんなことでは、まだまだだ……

「安心しろ。私とて、二度も殺されたくはない。ヌシと対峙することはないだろう」

「それは、良かったです。正直、ネロさんとは戦いたくない。勝てたとしても、半死でしょうしね」

俺は苦笑する。

「それじゃ、俺はこれで失礼します。今日はほんとにすみませんでした。店主さんが戻ってきた頃に日を改めて」

一礼して、店を出る。

「店主は一週間もすれば戻ってくるだろう。それと、気にするな。発端は私だ。詫びに一つだけ、耳よりな情報だ。この世界にもう一人だけ吸血鬼が来ているようだ」

「どうしてそれが？」

「なに、気配が私の旧友に似ているのでな……」

ネロさんは何かを思い出すかのように言っていた。

「あれ、志貴さん。奇遇ですね」

魔道具屋からの帰り、カズマとそれに負われたためぐみんと遭遇した。

「二人とも、今帰りかい？」

「はい。今日はなかなかの爆裂でした……」

「そうだな。あの音圧はなかなかだった」

何を話しているんだこいつら……

「志貴さんは何をしていたんですか？」

「俺はウインドウショッピングというやつだ」

答えとしては間違っていないと思う。

「ほう、何かいいものはありました？」

「欲しいものはこれといって無かったな。そういえば、めぐみんに似合いそうなペンダントがあったぞ」

値段はなかなかあげつなかつたが……あの魔道具屋、値段設定を間違っているのではないだろうか？　ここ、初心者が集まる街だよな……？

「プレゼントしてくれるんですか？」

「答えはノーだ。生憎、俺もお金がなくてね。慎ましく生活するしかないんだよ」

「確かにそうですね……ほんと魔王軍の幹部はタチが悪いです。いつそ私たちが狩りに行きましょうか」

グツ、と手を強く握り込むめぐみん。

「いや、お前本気で言ってるならここで降りして帰るからなっ!」

「ジョーダンです。ジョーダンですよ、カズマ!」

俺達には、冗談には聞こえなかった。この爆裂娘ならやりかねない。ていうか、目が半分以上本気だった。

「魔王に爆裂魔法とどちらが最強か、とか言ってたやつのことを信用しろと?」

「そ、そうだ、志貴!　明日はお暇ですか?」

めぐみんは俺に助けを乞うように、話題を変える。

「まあ、特にやることは決まっていないが……」

「それじゃあ、私たちに付き合ってください!　爆裂の素晴らしさを教えてあげましょう!!」

「考えておくよ」

それから、アクアとギルドで合流し、夕食を取った。アクアの夕食がキャベツ一色だったということは言うまでもないだろう。

夢というのは甘美で儂いものである

「……は……？」

それは、見たことがある風景。俺にとって、当たり前だった風景。俺が自害する前にいた町、三咲町だ。

「どうなってる？ 俺は夢でも見ているのか？」

眼鏡を外し、目をこする。

「線がない……？」

直死の魔眼が無くなっている？ 裸眼でも、世界が正常である。

「よお、遠野。どうしたんだ、ぼうつとしてよ」

一人で悩んでいると、後ろから背を叩かれる。

「有彦……」

「おいおい、どうしたんだよ。死人でも見てるような顔してるぞ？」

秋葉ちゃん、兄貴大丈夫か？」

「兄さんが惚けているのはいつもの事です。放っておいても問題ないでしょう」

「……秋葉？」

「つて、ほんとにどうしたんですか？ 熱でもあるんじゃない？」

俺は秋葉に抱きついていた。

「に、兄さん!? 時と場所を考えてくださいっ!! いい加減に……しなさいっ!!!」

げんこつが飛んできた。なかなか、いいものを持っている……

「おい、遠野。お前はシスコンだとは思っていたがそれほど重度だったのかよ……秋葉ちゃん、病院に連れて行ったほうがいいんじゃないか？」

「それもそうですね。検討しておきましょう」

顔を赤らめ、踵を返す秋葉。

「ごめんごめん、悪かったって。なんか、こう……急に秋葉のことがね……」

言葉に出来ない感情。それが、溢れ出てしまったのは否定出来ない。



「知りません。帰ったらお仕置きです！」

秋葉はスタスタと学校に向かう。しかし、その姿すら愛おしい……

ああ、俺はそれほど秋葉のことを……

「遠野、お前本当にどうしたんだよ？」

「いや、何でもない」

「ならいいんだけどよ。ほら、ガッコ行くぞ」

昼

休み

「遠野くん、遅かったじゃないですか。私、ずっと待ってたんですよ！」

「シエル先輩、いい加減に兄さんにひつつくのはやめてくれませんか？ はつきり言って迷惑です」

「あら、遠野くんは迷惑じゃありませんよね？ あ、カレー食べますか？」

放

課後

「それじゃあ、遠野くん。また明日ね」

遠

野郎玄関

「お帰りなさい志貴さん。ご飯にします？ お風呂にします？ それとも、秋葉様？」

「ちよっ!? 琥珀!? 何を言ってるの!？」

「あらあら、秋葉様。そんなに顔を赤くしてどうなされたんですか？」「姉さん、なかなか悪い顔をしています」

遠

野郎自室

なんとという甘い……甘美な生活だろう。これは俺の望んだ普通（幸せ）だ。だけど、俺には普通を得るなんていう資格はない。

これは、夢だ……

「あら、察しが良くて助かるわ。これは夢。あなたが見たい夢じゃないかって？ いえ、欲しかった未来かしら？」

どこからともなく現れた白い少女はクスクスと笑う。

「……君は？」

「そうね……私は夢魔よ」

「夢魔？ サキユバスみたいなものか？」

「ええ、そんな所ね。実際、少し違うのだけれどそう思ってもらってかわまないわ」

「素晴らしい、少女は椅子にストンと腰を落とす。

「どうしてこんな夢を？ 君の目的は？」

「ただの嫌がらせよ。なんで私がこんなやつを助けないといけないんだか……」

最後の方はなんといったか聞き取れなかったがどうも、気まぐれでこんな夢を見せられたらしい。

「まあ、私の気まぐれよ。悪夢を見せてそれを食べる。それが私。アナタには悪夢（幸福）だったでしょう？」

「それもそうだ。お礼を言っておくよ」

皮肉には皮肉で返してみる。

「あら、そろそろ時間ね。私はここでお暇させてもらおうわ」

そこで、俺の視界はブラックアウトした。

「——き——志貴、起きてください。いつまで寝てるんですか？」  
体が揺さぶられる。

「志貴、いつまで寝ているのですか？ いい加減にしないと、ここで爆裂魔法をブツパしますよ？」

不穏な言葉が聞こえた。

「やめてくれ。この宿だけじゃなくて、街が吹っ飛ぶ」

「あ、起きましたね。それにしても、大丈夫ですか……魔されてましたよ？ ——って、なんで泣いているんですかっ!？」

「泣いて……っ？」

頬に何かが伝うのが分かった。手を当ててみると、湿っていた。

「ああ、とても嫌な夢を見てしまったね」

「にしては、少し満足そうですね。気持ちが悪いですよ?」  
真顔でそんなことを言ってくる。

「うるさい。それにしても、何の用だ? めぐみんが俺の宿に来るなんて珍しいじゃないか」

一応、パーティーのメンバーには宿の場所は教えてあるけど、今まできた者はいなかった。

「昨日言ったじゃないですか。志貴を爆裂道に誘うために迎えに来たのです!」

「考えておくとは言ったけど、行くとは言ってないぞ?」

「どうせ暇でしょう? 行きましようよー!」

これは、行かないといつまでも駄々を捏ねられるやつだ。

「わかったわかった。行けばいいんだろ?」

城付近

古

「生きとし生けるもの、全てを殺す爆炎よ、我に集い給う。その世界に残るは我一人。強さは孤独としれ! エクスプロージョンツ!!」

凄まじい爆発が古城をおそう。

「おいおい、こんなのを毎日やってたのか?」

爆風と音圧が凄まじく、体がビリビリする。

「当たり前です。それにしても、今日のはかなりいい感じだったのではないでしょうか?」

「さすがだ、めぐみん。ほぼ満点だ。これで、倒れなかったら格好がつくのかな……」

カズマ君はめぐみんを拾い上げ、背負う。

「これが爆裂です。どうですか? 爆裂道と一緒に歩みませんか?」

「残念だけど、俺には無理だな。めぐみんだからできるんだ」

そんな、偏ったスキルの振り方なんてめぐみんくらいしか出来ないだろう。

「ふっふっふ……聞きましたか、カズマ? この爆裂魔法は私にだけ許された、最強の魔法なのですっ!!」

「ソツカー、ヨカツタナー」

俺の意図が唯一理解出来ていないめぐみんは満足気だ。

「カズマ、なぜ片言なのでしようか？」

「さあな。ほら、帰るぞー」

カズマはめぐみんを背負ったまま、アクセルの方向へ歩き出す。

爆裂魔法か……あんなの喰らったら一溜りもないだろう。

そう思いながら、俺は古城をみる。

「ん……う？ なにか……」

違和感が拭えなかった。だけど、それが何なのか全く分からな  
い。

「志貴さーん、どうしたんですかー？」

「ああ、すまない。ちよつと考え事をしてた」

そこで、違和感に気づけていたらなら、どれだけ良かったのだろう

……

違和感に気がついた時は、既にあとの祭りであった。

## デュラハン来る

「俺はつい先日この近くの城に越してきた魔王軍の幹部の者だが……」

この世界に来てから、二度目の緊急クエストである。ギルドでお茶をしていたところ、正門に徴集がかかったので行ってみると、そこにはデュラハンがいた。

「毎日毎日毎日毎日、お、お、俺の城に爆裂魔法を撃ち込んでく頭のおかしい大馬鹿は誰だあああああ」

爆裂魔法……？

街のみんなは、めぐみんを見た。

俺達も少なからず思い当たることはある。古城に爆裂魔法を撃っていたことだ。

今になって思ってみたら、あんな爆発だ。古城なんて、木っ端微塵になってしまふであろうに、ほとんど傷を負っていなかったのだ。

もう少し早く気づいていれば、こうなることを事前に防げたのかもしれないのに……

観念したのか、めぐみんは前へ出た。

「お前が……！ 俺が幹部だと知っていて喧嘩を売っているなら堂々と城に攻めてくるがいい！その気が無いなら街で震えてるがいい！ ねえ、何でこんな陰湿な嫌がらせするのお!? どうせ雑魚しかない街だと放置しておれば調子にのって毎日ポンポンポン撃ち込みに来おって！」

当事者になってみれば、相当迷惑な話である。毎日、あんなものを撃たれたら溜まったものじゃない。

「我が名はめぐみん！ アークウィザードにして爆裂魔法を操る者！」

「……めぐみんって何だ。バカにしてんのか？」

やっぱり、そうなるよな……俺だってそうだった。そうならない奴はなかなかいないだろう。

「ち、違わいつ!! 我は紅魔族の者にしてこの街随一の魔法使い。爆

裂魔法を放ち続けていたのは貴方をおびき出すための作戦。こうしてまんまと一人で出てきたのが運の尽きです」

めぐみんは自信満々に言っているが――

「いつの間に作戦になったんだ？」

「しかもさらつと、この街随一とか言い張ってるな」

「しーっ！ 後ろにたくさんさんの冒険者が控えてるから強気なのよ。今良い所なんだからこのまま見守るのよー」

アクアはどこか楽しんでいるように見える。これでいいのか女神様。

「まあいい。俺はお前ら雑魚にちよつかいかけにこの地に来た訳ではない。しばらくはあの城に滞在する事になるだろうが、これからは爆裂魔法は使うな。いいな？」

どうやら、このデュラハンは話を通じる相手らしい。こちらが、何もしなければ、何もしてこないし、時が経てば去るといふ事だ。それなら、いつでも殺るチャンスは出てくる。

「無理です。紅魔族は日に一度爆裂魔法を撃たないと死ぬんです」

期待した俺が馬鹿だった。

「聞いた事がないぞ！ 適当な嘘をつくなよ！」

デュラハンにもわかる嘘をつくのはやめてほしいところだ……

「魔に身を落とした者ではあるが元は騎士だ。弱者を刈り取る趣味はない。だが……」

デュラハンはめぐみんを睨む。そりや怒るだろう。誰だって、怒るに違いない。

「ふっ……余裕ぶっついてられるのも今の内です。先生、お願いします！」

めぐみんのご指名。

「しようがないわね!! この私がいる時にくるとは運が悪かったわね。あんたのせいでまともなクエストが請けられないのよ！ さあ覚悟はいいかしら!？」

女神様もノリノリである。

「こんな街にいる低レベルのアークプリストに浄化されるほど落ちぶ

れてはいない。ここは一つ、紅魔の娘を苦しませてやろうか。汝に死の宣告を！ お前は1週間後に死ぬだろう！」

何かまずい。そう思った時には既に遅かった。

「うっ……わあああああああああ！」

だが、その呪いはダクネスによって阻まれた。その身を呈して……「紅魔族の娘よ。そのクルセイダーは1週間後に死ぬ。フフ……お前の大切な仲間はそれはで死の恐怖に怯え苦しむ事になるのだ。そう、貴様のせいだな！ 仲間の苦しむ様を見て自らの行いを悔いるがいい。クハハハハハ！」

デュラハンは高らかに笑う。しかし、そんな呪いはダクネスにはむしろ御褒美だったらしく――

「つまり貴様はこの私に死の呪いを掛け、呪いを解いて欲しくば俺の言う事を聞けと……つまりはそういう事なのか！」

「フアツ！」

デュラハンの声が裏返る。

「くっ……呪いごときで屈したりはしないが……どうしよう、カズマ!! 見るがいい、あのデュラハンの兜の下のイヤラシイ目を！ あれは私をこのまま城へと連れて帰り、呪いを解いて欲しくば黙って言う事を聞けと凄まじいハードコア変態王令を要求する変質者の目だ！

この私の体は好きにできても心までは自由にできるとは思うなよ！ 城に囚われ魔王の手先に理不尽な要求をされる女騎士とか……ああどうしようカズマ！ 予想外に燃えるシチュエーションだ！ 行きたくはない、行きたくはないが仕方がない！ ぎりぎりまで抵抗してみるから邪魔はしないでくれ。では、行ってくりゅっ!!」

大丈夫なのか、うちのメンバーは……心底心配になってきた……

「やめろ、行くな！ デュラハンの人が困っているだろ!!」

「放せえ！ 止めてくれるな！」

カズマはダクネスを引き止めるが、ダクネスがそれで止まることは無かった。

「と、とにかく爆裂魔法を放つのは止めろ！ そして紅魔族の娘よ！ そのこのクルセイダーの呪いを解いて欲しくば俺の城に来るがいい。





「いい攻撃だが、残念だったな。来るとわかっていれば避けることは可能だ。しかし、貴様の攻撃は少し嫌な予感がしてな。回避に徹底させてもらうぞ」

「勘がいいな」

「それでも、様々なやつと戦ってきたからな。これは俺の感だが、お前は毒だ。何であれ、殺してしまう猛毒。それを受ける気にはならんよ」

なるほど。相手の能力を把握するには長けているのか。しかし、能力自体はバレていないようだ。

「なるほどね。騎士様は、剣を交えるのを諦めたと？」

「クハハハ、残念ながら俺はもうデュラハンなのでな。そんな挑発にはのらんぞ？」

これは困った。なれば、こちらから行くしかない。

「それなら、斬り伏せるまでだ」

腰を低くかがめ、水月で後ろに回り込む。

『閃鞘・迷獄沙門』

閃鞘にして、七技に数えられない異端の技。すれ違いざまに、上・中・下段の全てを斬る技。

しかし、殺せたのは剣だけだった。

「即座に反応とか、チートかよ……」

「見事。剣をもっていられるとは思わなかったぞ。その太刀、本物と認めよう」

「なら、ダクネスの呪いを今すぐに解け」

「それとこれとは話が別だ。それは、あそこにいる頭のおかしいアークウィザードへの戒めだ」

「なら、アンタをやるしかない、ということか」

「残念だが、俺を殺しても呪いは消えんぞ？ 消したくば、俺の城まで来ることだ。クハハハハ」

それを最後に、デュラハンは消えていった。転移魔法かなにかだろう。

「めぐみん、どこに行くつもりだ？」

「ちよつと城まで行つてあのデュラハンに直接爆裂魔法をぶち込んで呪いを解かせてきます」

「俺も一緒に行くに決まってるだろうが。お前一人じゃ雑魚相手に使つてそれで終わっちゃうだろ。そもそも俺も毎回一緒に行きながら幹部の城だつて気付かなかつたマヌケだしな」

めぐみんとカズマはダクネスを助けるため、古城の方に歩いていこうとする。

「いや、呪いについては心配いらぬ。ダクネス、じつとしてい……」

呪いはダクネスに取り付いている。外見は何も無いから、体内を毒のように回っているのだろう。

呪いも概念の一つだ。それならば、殺せない道理はない。

「な、何をする気だ！ 私に……仲間にナイフを向けるだと……？」

私の所望するシチュエーションだが、やめろおー！」

「少し黙つていてくれないか……」

やる気が削がれてしまう。だけど、やるしかない。

ダクネスを視るのではない、それに憑いてる呪いを視ろ。ダクネスではない、点を見るんだ……

目を凝らす。

ここでしくじれば、ダクネスは1週間後に死んでしまう。そんなことはさせない。

「……だ……」

俺は呪いの点を穿った。

「志貴、今何をしたのですか？」

「呪いを殺した。アクア、確認をしてくれ」

「ちよつと、ほんとに消えるじゃない……志貴、なによそれ！ そんなことされたら、私の出番がないんですけどっ!？」

出番？ もしかして、俺が何もしなくても、アクアがどうにかしてくれたのだろうか？

「志貴さん、確かに今ダクネスを刺したよな？ 何で傷がないんだ？」

「よくわからない……俺も無我夢中だったからな……ともあれ、クエ

ストは終了だろ？」

正門の方から歓声が上がった。

それは、クエスト完了の合図であった。

## 正義の味方 誰の味方？

「出廻らし女神が……運ばれてくよー……きーつとこのまま……売られて行くーよー……」

「もう街中なんだからその歌は止めてくれ。というか、いい加減出てこいよ」

現在、うちの駄女神ことアクア様は、檻の中で座り込んでいる。檻自体は、馬に引かせているから問題は無いのだけれど、周りの目がなかなか刺さる。

カズマ君の言うとおりに檻から出てくれれば、なんの苦勞もないのだけど……

「嫌。この中こそ、私の聖域よ」

この通り、女神様は病んでいる。というのも、今日行ったクエストが問題だ。

そのクエストというのは、湖の水質が悪くなりブルータルアリゲーターが住みつき始めたので水の浄化して欲しいとのことだった。

もともと、アクアが借金のためカズマに泣きついてきたことから始まったのではあるが、アクアを檻に入れ、湖の真ん中に檻を置いたのであった。事実、アクアはアリゲーターから襲われることなく、湖の浄化に専念できてはいたのだが、現実はその甘くもない。

檻に入っているアクアを食おうと、アリゲーターは檻を攻撃したわけだ。

おかげで、檻と檻の中にいたアクアの心はボロボロである。あんな中、よく湖を浄化出来たものだ。やはり、腐っても女神なのだろう。

「女神様じゃないですか！ 何をしているのですかこんな所で！」

誰だろう。フルプレート青年が寄ってくる。そして、檻を手でこじ開けた。

なにごとっ!?

「おい、私の仲間に馴れ馴れしく触るな。貴様何者だ？」

ダクネスがアクアに近づくと青年を止める。

しかし、ダクネスが珍しくまともなことを言っている気がする。

「あれ、お前の知り合いだろ？　女神とか言ってたし」

「女神…？　…そうよ、女神よ私は！」

女神様は急に元気になる。まさか、自分が女神だということを忘れていたのだろうか……

「さあ、女神の私に何の用かしら?!　…あんた誰？」

「僕ですミツルギ・キョウヤですよ！」

あなたに魔剣グラムを頂きこの世界へ転生した！」

「……？　ああ、いたわねそんな人も！」

結構な数の人を送ったし忘れてたっけしようがないわよね！」

しようがなくはないだろ。いや、逆に仕事をしっかりしてきたってことなのか……？

「お久しぶりですアクア様。あなたに選ばれし勇者として、日々頑張っていますよ。ところで、アクア様は何故檻の中に閉じ込められていたのですか？」

それは、本人が檻から出たがらなかったためである。

カズマ君はあつたことを一点の間違いもなく話した。

「はあ!?　女神様をこの世界に引きずり込んでしかも檻に閉じ込めて湖に漬けた？　君はいったい何を考えてるんですか!？」

ミツルギという男は、カズマに掴みかかる。

間違っってはいいないけれど、言い方がなかなか酷い。事実であるから、何も言い返せないのが事実なのではあるが……

にしても、アクアはカズマ君の特典だったのか……とんだ貧乏くじだったというわけだ。

「ちよ、ちよつと！　私としては結構楽しい日々を送ってるしここに連れてこられた事はもう気にしてないし」

アクアは助け舟を出す。

しかし、この女神。この世界に無理やり連れてこられ、楽しんでいるとはなかなか嬉しいな……

「アクア様、この男にどう丸め込まれたか知りませんが、あなたは女神ですよ？　それがこんな……」

なるほど。アクアにも信者はあるという事か。それにしても、言い

たい放題だな。

「ちなみにアクア様は今どこに寝泊まりしてるんです?」

「えっと……馬小屋で」

「は……?」

カズマを掴む力が一層強くなるミツルギ。

「おい、いい加減その手を離せ。礼儀知らずにもほどがあるだろう」

「ちよつと撃ちたくなくなってきました」

ダクネスが珍しくまともである。めぐみんはミツルギという男が気に入らないらしく、杖を構える。

「それは辞めてやれ。カズマ君も死ぬ。しかし、このクルセイダーの言う通りだ。いくら、君の尊敬する女神様が乱暴に扱われているからと、無礼すぎるんじゃないか?」

こんなところで爆裂魔法を撃たれては、俺の命まで危ない。めぐみんを宥めるついでに、ミツルギにも忠告しておく。

「君たちは、クルセイダーにアークウイザード、アサシンか。なるほど、パーティーメンバーには恵まれているんだね。君はこんな優秀そうな人達がいるのに、アクア様を馬小屋で寝泊まりさせて、恥ずかしいと思わないのか?」

どんだんカズマ君の顔が歪んでいくのがわかる。それもそうだ、このミツルギ青年はカズマ君の苦労など一つも知らないのだから。

「君たち、これからはソードマスターの僕と一緒にくるといい。高級な装備品も買い揃えてあげよう」

なんだろうこの人間。なんていうか、すごく気に食わない。

「ちよつとやばいんですけど。あの人、ホントひどくくらいやばいんですけど。ナルシストも入ってる系で怖いんですけど」

それは、アクアも同じらしい。

「どうしよう。あの男は生理的に受け付けない。攻めるより受けるのが好きな私だが、あいつだけは無性に殴りたいのだが……」

ダクネスに至っては、引いている。ミツルギはなかなか才能があるのかもしれない。

「撃つていいですか? 撃つていいですか?」

「だから、やめなさい。街が壊れるだろ？ 何かあったら俺がやるから安心しろ」

杖を構えているめぐみんに軽くチョップをする。

「えーと、満場一致であなたのパーティには行きたくないみたいです。じゃ、これで」

俺達はミツルギに背を向け、歩きだす。

「待て。悪いがアクア様をこんな境遇に置いてはおけない！」

しかし、回り込まれてしまう。

「勝負をしないか？ 僕が勝ったらアクア様を譲ってくれ。君が勝ったら何でも一つ言う事を聞こうじゃないか」

カズマ君はこうなることを予想していたのか、少し口元が歪んだ気がする。

「よし乗った、行くぞ！」

間髪入れずに、カズマ君は件を抜き、ミツルギに切りかかる。

「ちよっ!? 待つ……」

もちろん、ミツルギはカズマ君との距離をとるが――

「ステイルッ!!」

魔剣グラムのステイルに成功したカズマ君は魔剣グラムの腹をミツルギの頭に落とした。

ステイルって、パンツしか盗まないと思っていたのだが、案外カズマ君が思ったものが盗めるのかもしれない。これも、彼の幸運あつてのものか。

「グラムを返しなさい！ グラムはキョウヤにしか使えないんだから！」

ミツルギのパーティーメンバーが

「……マジで？」

「魔剣グラムはその痛い人専用よ」

アクア曰く、どうやら事実らしい。

「まあせっかくだしもらっとくか」

さすがはカズマ君。貰えるものは貰っておく精神が凄い。

「ちよ、ちよっどー！」

「こんな勝ち方私達は認めない！」

「真の男女平等主義者な俺は女の子相手でもドロップキックを喰らわせられる男。手加減してもらえるとと思うなよ？公衆の面前で俺のステイルが炸裂するぞ」

カズマ君の手つきは、犯罪者そのものだった。ミツルギのパーティメンバーの女子ふたりはかなり引いている様子。

「ま、待てっ！今はノーカウントだ。正々堂々と戦え、この卑怯者っ！」

気絶していたミツルギが目を覚ましたらしい。傍観者に徹底していたが、そろそろ腹が立ってきた。なんて惨めなんだろう。

「いい加減にしろ。アンタは勝負と言ったが、開始の交渉はしていないだろう？ 負けは負けだ。カズマ君を卑怯だというのなら、ソードマスターが冒険者に決闘をふっかけること自体卑怯だろう。それ以上言うなら、俺が相手になる」

眼鏡を外し、ナイフを抜く。

「志貴さん、あいつは勝つまで言い寄ってくるタイプですよ。無視するのが一番です」

「志貴さん志貴さん。殺しはいけないのよ？ いくら私がアークプリーストでも、志貴が殺した人を生き返らせるのは難しいわよ？」

「志貴、弱いものいじめはいけませんよ？」

「まて、志貴。その本気は私に向けてもらえないだろうか？」

「上等だ。クレメア、剣を貸してくれないか？」

ミツルギは同じパーティのクレメアという少女から剣を借り受ける。

「このコインが地面に落ちたら開始だ。それでいいな？」

ミツルギが領いたのを確認すると、コインをトスする。

腰を低くかがめ、地面についた瞬間、俺を地面を強く蹴った。

『閃走・六兎』

瞬時に同じ箇所目掛けて蹴りを六発叩き込む七夜の体術である。それを、腹部めがけて叩き込む。

「勝負ありだ」



ミツルギは腹を抱え、地面に倒れ込む。たが――

「僕は勇者だ……こんなところで負ける訳にはいかないんだっ！」

この世界を……全部を救うとアクア様に誓ったんだっ!!」

さすがはソードマスター。あれを直にくらって立ち上るとは思わなかった。

「全部を救う、ね。さすがは勇者様。感心するよ。だけど、それは傲慢だ。人は何かを救っても、全部を救うことなんてできない」

そう。俺は、秋葉を救うために、自分を殺した。それが、秋葉を救うための唯一の方法だと考えた。だけど、秋葉は救われたのだろうか……？ 俺は救われたのろえか……？

秋葉はきつと俺のいない世界で、一生懸命生きている。そう思いたい。そう思うことで、俺は今、どうにか救われている。秋葉の元気な姿を思い浮かべること救われている。

だけど、秋葉は救われたのだろうか？ 確かに、俺は秋葉を救ったと思う。だけど、その後は？ 翡翠は？ 琥珀さんは？ 有彦は？ シエル先輩は？ みんなは？

救ったつもりが、みんなを悲しませる結果になっている。

俺は人の死の上に立ちながら、死を選んだ。

なんて、傲慢……

誰もかもが救われる世界。それは確かに理想郷だ。だけど、そんな世界はありえない。

それは、夢物語なのだから……

「僕は……間違っていない！」

「それが間違いなんだよ……」

俺は、あの子を救うための方法は他にもあったかもしれない。けど、俺はあの子を殺すことであの子を救った。

今にも夢に見る。あれは、間違いだったんじゃないか。他に道はあったんじゃないか、と。

斬りかかってくる、ミツルギの剣、そしてアーマープレートを殺した。

「勝負ありだ。これで文句はないだろ？ これ以上何か言うなら、そ

の肉体も切り刻むと思え」

ミツルギは脱力し、その場に倒れ込んだ。  
「ほら、みんな。帰るぞ」

俺達は、ここで各自解散となった。

## デュラハン来る2

にやあ……

目を覚ますと、白猫が部屋の中に入ってきていた。

「なんだ、また来たのか」

最近、俺の部屋によく白猫がくようになっていた。その毛並みは綺麗で、まるで絹のようだ。

「全く、この部屋のどこが気に入ったのやら。ほら、これくらいしか出せないぞ」

白猫に差し出すは、皿に注いだミルク。もしかすると、これが目当てなのかもしれない。

「しかし、君はどこから来るのかな？」

撫でようとするが、逆に引っ掻かれてしまう。どうも、俺のことがお気に召さないようである。

「それじゃ、俺はもう行くよ。君は好きなだけいるといい」

いつもそう言つて部屋を出るのだけど、帰ってきた時にはもういなくなってしまうている。

そして、翌朝また現れる。その繰り返しだ。

猫は気まぐれとはいうが、白猫はどこか自分の意思がしっかりしているかのようにも思える。

変な猫。そう言い切つてしまえば簡単なのだろうが、なかなかそうもいかない。何故なら、この世界には猫っぽいものはいても、猫そのものはいないらしいのだから。

アクアは注意しろ、とは言っていたが、流石に邪険にはできないというのが現状である。

『緊急！ 緊急！ 全冒険者の皆さんは直ちに武装し街の正門に集まってください！ 特に冒険者サトウカズマさんとその一行は大至急でお願いします』

ギルドへ向かう途中、緊急クエストの警報が街中に響きわたった。

「カズマ君達、何かやらかしたのか……？」

疑う訳では無いけれど、前科だらけの彼らだ。仕方が無いと思う。

俺が正門についた頃には、冒険者で一杯になっており、カズマ君、アクア、めぐみん、ダスネスも既に集まっていた。

「あ、志貴さん。おはようございます」

「おはよう、みんな。しかし、なんの騒ぎだ？」

「おはようございます、志貴。アレですよ、アレ」

めぐみんは平原の向こうを指さす。

「なぜ城に來ないのだこの人でなしどもがああっ！」

そこに居たのは、以前撃退したはずのデュラハンだった。

「何で？ もう爆裂魔法を撃ち込んでもいないのに」

カズマ君の言う通りだ。あれから、カズマ君とめぐみんがふたりで街を出ていくのは見たことがない。

「何を抜かすか、白々しい。その頭のおかしい紅魔の娘が毎日欠かさず通っておるわ！」

毎日だと……？

「めぐみん、そこになおれ。成敗してくれる」

「ま、待ってください、志貴。冗談抜きで死んでしまいます。それに、城への魔法攻撃の魅力を覚えて以来、大きくて硬いモノじゃないと我慢できない体に……」

ダメだ、この娘。ほんとに頭がおかしいのではないだろうか……

「めぐみん、大体お前魔法撃ったら動けなくなるだろうが！ てことは共犯者がいるだろ！」

カズマ君の名推理にアクアが吹けもしない口笛を吹き出す。なんてわかりやすいのだろう。

「お前かああああー！」

カズマ君はアクアの頬を思いつきり引つ張る。

「アイツのせいでもろくなクエスト請けられないから腹いせがしたかったんだものー！」

それはわかるが、やっていいことと悪いことがある。もちろん、この場合は後者だ。

「聞け愚か者ども。この俺が真に頭にきていることは他にある。貴様らには仲間の死に報いようという気概はなかったのか!」

仲間の死? 誰か死んだか?

「仲間を庇って呪いを受けたあのクルセイダー……騎士の鏡の様なあの者の死を無駄にするなど——」

その騎士の鏡はデュラハンに向かって元気そうにヒラヒラと手を振る。

「あるええええええええええ!? 何故だ!? あの時確かに呪いをかけたはずだ!!」

「あれなら俺が殺しておいた」

「馬鹿を言うな! アークプリーストであるならいざ知らず、アサシンのお前が呪いを解けるはずがあるまい!!」

この世界の常識ならそうだろう。だけど、俺にはこの直死の魔眼がある。呪いに概念があるなら、殺せるのが通りだろう。

「事実なんだから、受け入れることだな」

「なになに? このデュラハンずっと私たちを待ち続けてたの? プークスクス!」

アクアはデュラハンを挑発する。前回、挑発は効かないというのは分かっているが、時と場合を考えて欲しいものである。

「おおおお、俺がその気になれば街の住民を皆殺しに!」

「させると思うか?」

『閃鞘・八穿』

相手の頭上に高速移動し、切りつける技。

「ぬおー!」

「ちっ……やっぱり、駄目か」

だが、デュラハンが乗っていた馬は殺せた。これで、馬による移動は不可能なはず。これなら、今日は何故かやる気な女神様の出番だ。

「アクア、今だ!!」

「任せなさい! ターンアンデッド!!」

聖なる光が、デュラハンを包み込む。

「ぎゃあああああああ!!」

「ね、ねえ変よカズマ、志貴。効いてないわ!!」

「いや結構効いてた様に見えたんだが。ぎゃーって言ってたし」

「多分聞いている。もう一度頼む!」

もう一度決まれば、かなりの消耗なはずだ。このまま、短期で決める。

「させるか! アンデッドナイト! この連中に地獄を見せてやるがいい」

デュラハン アンデッドナイトというアンデッドのモンスターを召喚するが――

「セイクリッド・ターンアンデッド!」

アクアの聖なる魔法の前に塵となってしまった。

「ひあああああああつ!!? 目が! 目があああああ!!」

デュラハン は地面をのたうち回っている。チャンスは今だ。

「このまま、引導を渡す!」

「小癩な!」

しかし、俺の斬撃は避けられてしまう。

「そろそろ、斬られてくれないかと思っただけどね」

「クハハハハ、そもいかんさ。俺は俺でお前と戦うのを楽しんでいるのでな。お前の本気、見たくなつたぞ。さてどうしてくれよう……

そうだな、街の連中を皆殺しにする! いけ、アンデッドナイトよ」

再び大量にアンデッドナイトが生成され、正門の方に走り出す。

「なっ!?!」

「おっと、アサシンの小僧よ。お前は俺が相手だ」

正門に戻ろうとするが、デュラハンに阻まれる。向こうはカズマ君達が何とかやってくれるはずだ。

そして、数分攻防を繰り返していると、アクアとカズマ君がアンデッドナイトの集団を連れて走ってきた。

なにか嫌な予感がする――

そう思った頃には、時すでに遅しだった。

「エクスペローション!!!」

俺は横に跳んだが間に合わず、めぐみんの爆裂魔法に巻き込まれて

しまった。直撃は免れたが、すぐには立てそうもない。

「凄く……気持ち良かったです……」

当の本人は、満足した顔で地面に突っ伏している。

これで終わり。そう思ったかった。

「クハハハ！ 面白い。お前らの相手も、この俺自らしてやろう」

しかし、デユラハンが爆裂魔法を受けてなお、立っていた。

「ふざけるよ……このバケモノ……」

体に鞭を打つが、体が起き上がらない。あれで決まっていれば、なんてことは無かったはずなのに、今はピンチだ。

「ビビる必要はねえ、すぐにこの街の切り札がやってくる！」

「魔王軍の幹部だろうが何だろうが関係ねえ！ 爆裂魔法で弱っている今がチャンスだ!!」

数人の冒険者がデユラハンを囲み、攻撃を試みるが、それは虚しく、程なく冒険者たちは死を迎えた。

「あ、あんななんか今にミツルギさんが来たら一撃で斬られちゃうんだから！」

冷や汗が流れたのがわかった。

切り札とは昨日、剣を奪われ、鎧を切り裂かれたあのソードマスターだったのだ。

カズマ君も分かったのか、すごく気まずそうな顔をしている。

「くそ……よくも、みんなをつ!!」

立ち向かうは、騎士の鏡であるダクネス。その太刀筋は、岩をも砕く。

否、岩しか砕かなかった。

止まっているはずのデユラハンに太刀の一つも浴びせることが出来なかつたのだ。

そこからは、ダクネスの防戦一方だった。ダクネスの攻撃は当たらないが、デユラハンの攻撃は吸い込まれるように当たっていく。

「ダクネス、下がれ!!」

それを見かねたカズマ君はダクネスを下がらせようとする。

「クルセイダーは背に誰かを庇っている状況では下がれない。これ

「ばっかりは絶対に……」

まさに騎士の鏡。ど変態とばかり思っていたが、少しは見直してしまおう。

「それにこのデュラハンはやり手だぞ。こやつ先程から私の鎧を少しずつ削り取るのだ。全裸に剥くのではなく中途半端に一部だけ鎧を残し、私を公衆の面前で裸より扇情的な姿にして辱めよう……っ」  
前言撤回だ。デュラハンの前にクルセイダーをはやく何とかしない……

「ええい、黙ってる!! クリエイトウオーター! からのフリーズ!!!」  
カズマ君は水の魔法でデュラハンの足場を水浸しにし、氷魔法でそれを固めた。これにより、デュラハンの足は凍りつき、動きが一時であるが止められる。

「回避し辛くなればそれで十分、本命はこつちだ! ステイル!!!」  
しかし、その手には何も握られていなかった。

「悪くはない手だったな。レベル差というヤツだ」  
「いや、充分だ」

俺への敵対心が完全に解けている今、俺にやることは一つだった。

『閃鞘・迷獄沙門』

背後から、デュラハンの線を十数本斬り裂いた。

「俺から注意をそらしたのは間違いだったな。そうなれば、俺の領域だ」

「クハハハハ……本当に死人を殺すか……天晴れ、人の子よ。貴様の方がよっぽどバケモノだ」

バケモノか。自分の望みを叶えられるのならば、俺はバケモノにだってなるだろう。俺を生かすという望み叶えようとした、最愛の妹のように……

「そりやどうも。アクア、送ってやれ」

「任せなさい。セイクリッド・ターンアンデッド」

こうして、デュラハン討伐は幕を閉じた。

「カズマ君、ありがとう。君がデュラハンの注意を引いてくれたから、どうにかなったよ」



「いやあ、ステイールが失敗した時はどうなるかと思いましたよ、ホント」

あれは、カズマ君のファインプレーあつてのものだ。

「で、カズマ君。なにか、開き直すことはあるか？」

終わりよければすべてよし、という訳にはいかない。なんせ、こちらには死にかけたのだ。罪は罪。しつかりと償って貰わねばなるまい。

「ままま、待ってください、志貴さん!! 俺はあの時の最善の策を!!」  
そんなことは分かっている。少しおちよくってみたくなったのだ。

「最善の策、ね。全く、あんまり無茶をさせないで……くれ——」  
そこで、どうにか保っていた俺の意識は完全にブラックアウトした。

夢魔だつてケーキが食べたい

「夢……？」

俺は目を覚ました。あたりを見渡すと、そこは自室。

「おはようございます、志貴様。今日はお早いのですね」

「おはよう、翡翠。なんか嫌な夢を見てね」

「夢、ですか？」

「ああ。俺が異世界に飛ばされて魔王と戦うんだよ。おかしいと思わないか？」

「それは面白そうです」

そんなことを言う翡翠は、どこか興味津々に見えた。

「兄さん、いつまで寝ているのですか？」

「おはよう、秋葉。今日は——」

あれ……？ 今日の前定はなんだったっけ？

「早く学校に行かないと遅刻するな」

そう、今日は平日だ。学校に行くのは当然だろう。

「当然です。早く用意をしてください！」

秋葉に急かされ、学校に行く準備をし、遠野邸を後にする。

「志貴先輩、おはよっす!!」

「おはよう、和真君。今日は一人かい？」

いつもなら、和真君の幼なじみが一緒のはずなのだけど、今日は一人のようだった。

「そうですよ。あのバカ、昨日夜遅くまでなにかしていたみたいですからね。うちの幼なじみも遠野さんみたいにお淑やかならいいんですけど……」

和真君は秋葉を見る。

「佐藤さん、私を褒めても何も出ませんよっ」

「分かっていますっ」

しばらく雑談をしながら、登校をする。

「ふっふっふ、志貴先輩、和真先輩。来ましたね!! 今日こそ、積年の決着をつける時がっ!!」

目の前に立ち塞がったのは、眼帯をつけた中学生。その娘は俺達がよく知っている子だった。

「あれ、恵ちゃん。眼帯なんかしてどうしたんだい？」

「違わいつ!! 我が名はめぐみん! この目には封印されし力が宿されているのだ!!」

「おいこら、中学はこういう装飾品は禁止だろうが」

和真君は恵ちゃんの眼帯を引っ張り、その手を放す。なかなか痛そうである。

「あうう……そ、そういえば、志貴先輩。今度、志貴先輩たちの高校で文化祭をやるって聞きました!」

「文化祭……?」

「そういえば、文化祭っていつだっけ……?」

「つて、今日じゃないかつ!!」

完璧に忘れていた。昨日だって準備をしていたじゃないか。

「志貴先輩、忘れてたんっすか!?!」

「いや、忘れてたわけじゃないんだけどね……」

「今日だったのですか……今日、中学は午前中しか授業がないので、午後から行きますね」

「秋葉たちのクラスは何をするんだ?」

「うちは、お化け屋敷よ。佐藤さんがどうしてもやりたかったらしいのよ。兄さんのところは?」

「うちは確か喫茶店だよ。食い逃げ喫茶ローキックだったかな」

その名の通り、食い逃げが許される喫茶店だ。もちろん、捕まればその報いは受けてもらう、というのがうたい文句である。

「な、なかなかユニークですね……」

俺もそう思う。

「よう、遠野。遅かったじゃないか」

「そうでもないだろ。有彦、そっちの準備は出来てるのか?」

今日は珍しく、時間に余裕がある。

「徹夜で何とかだな」

「悪いな。帰らせてもらって」

「いいってことよ。お前には愛しの秋葉ちゃんがいる事だしな」

「おちよくってんのか?」

「ああ、おちよくってる。まあ、遠野のシフトは昼からだ。それまで好きにしろよ」

「それじゃ、そうさせてもらおうよ」

と、なればどうするか。

秋葉たちのところに行ってみよう。

「志貴せんぱーい、こっちです」

お化け屋敷の入口であろうところに、和真君はいた。

「和真君は受付なんだね」

「ええ、設計は俺がやりましたから仕事は楽なほうがいいでしょ?」

急にお化け屋敷に入りたくなくなってきた。

はつきり言って、和真君はたちが悪い。和真君のせいで何度も厄介事に巻き込まれているのは言うまでもないだろう……

……ん? 今、何か大切なことを――

「まま、志貴先輩。入ってみてくださいよ」

和真君に言われるまま、お化け屋敷に入る。その内容はかなり本格的なものであった。

そこはもう、恐怖の嵐であった。奇襲に次ぐ奇襲の数々。和真君の性格の悪さが見受けられる。

途中で宴会芸をしている和真君の幼なじみがいたが、それは見なかったことにしよう。

そういえば、俺も一年の時はお化け屋敷をやったんだよな。あの時はイヌイダケお子様誘拐事件がおきて――

閑話休題。

とうとう、ここが最後。和真君の事だ。とんでもないものを配置しているに違いない。

息を呑み、最後のゾーンに足を踏み入れる。

「シャーーーーー!!」

俺は思考が止まった。

驚かなかつたといえは嘘になるけど、それ以前の問題だった。

「あ……秋葉、その格好は……?」

白い和服を着た秋葉が飛び出してきたのだ。オマケに、猫耳の力チューシヤなんかしている。

「に、兄さん……? っ!?」

まさに時間が止まった。和真君、君は時を止めることが出来る魔法使いだっただね。

じゃなくてっ!!

「確か猫又、だったか?」

「はい……」

秋葉は顔を赤くして、それ以上何も言わなかった。俺も、何も言えなくなった。

「それじゃ、行くよ」

なんとも言えない空気の中、俺はお化け屋敷を出た。

「志貴先輩! どうでした?」

「和真君。あとで、体育館裏集合だ」

「あははは……それで、志貴先輩はこれからどうするんですか?」

俺、今からフリーなんですけど一緒に回りませんか?」

「もちろん。今からシエル先輩とダクネス先輩のところに行ってみるつもりだよ」

和真君とふたりで三年の教室に向かうが――

「ふざけないで下さい! なぜカットなんですか!!」

「いい……いいじゃないか! ここに来てボツなど、最高じゃないか!」

三年の教室の前で何かを言っているふたり。

「和真君……」

「多分俺も同じことを考えてます」

回れ右。触らぬ神に祟りなしというやつだ。

やることも無く、程なく歩いていると、人だかりがあった。

「なんだあれ?」

「先輩、あの子確か先輩のところのメイドさんじゃなかったですか?」  
人だかりを見ると、その中心には翡翠がいた。

「翡翠っ!?!」

人だかりを掻き分け翡翠を救出する。

「ありがとうございます、志貴様」

「どうしたんだ、翡翠。こんな所に出てくるなんて珍しいじゃないか」  
「お昼にこれを持ってまいりました」

重箱の中には、サンドイッチが入っていた。

「これ、翡翠の手作りなのか?」

「はい。志貴様が梅のサンドイッチが好きだと申しておりましたので」

その後は地獄だった。

なんで、パンがピンク色になってるんだ……?　なんで、こんなにグチヨグチヨと湿ってるんだ……?

俺は恐る恐る、それを口に運ぶ。

「……っ!?!」

一瞬、川の向こうでお爺さんが手を振っていたのが見えた気がする。

俺は梅の風味が好きなだけで、梅自体はそんなに好きというわけじゃない。

こ、これはやばい。それは和真君も感じ取ったようで、逃げる隙を探している。

「和真君もよかったら一つどうだい?」

「遠慮しておきます!　翡翠さんは遠野さんのために作ったんですから!」

「いえ、皆様のぶんも作ってきているのでご安心ください」

和真君の逃げ道は一瞬にして潰されてしまう。

和真君にも手伝ってもらい、梅サンドを平らげた。翡翠は味見をしていたらしく、それなりにうまく出来ているとのことだった。

お昼の時間が過ぎ――

『ちよっと、志貴!!　早く目を覚まさない!!』

これから、喫茶店の準備を使用しているところで、頭に声が響いた。

「な、なんだ!？」

『私が回復してやってるんだから、早く目を覚まさないって言うてるの!!』

目を覚ます……? それじゃあ、これは……

夢……??

「ああっ! ちょっと待ちなさいよっ!! 今から私がケーキを食べられるところでしょうが!! 今日覚めちやつたら——」

どこからとも無く現れた白い少女。そんな少女をよそに、俺は目を覚ましたのであった。

どうやら、平行世界の遠野志貴は鬼畜らしい

「……は……」

目を開くと、パーティーメンバーが俺の顔を覗き込んでいた。どうやらここは、俺が借りている宿の一室らしい。

「やっと目を覚ましたわね。傷は治っているのにいつまでたっても目を覚まさなかったから心配したのよ」

「すまない。どうも、夢を見てたみたいだ。俺はどれくらい寝てたんだ？」

「3時間です。怪我は倒れてからすぐにアクアが治したのですが……夢ですか？ どのような夢を見ていたのです？」

「ううん……覚えてない。ただ、いい夢だった、かな」

内容を思い出そうとするけど、全く思い出せない。夢というものはそういうものである。

「ともあれ、みんなには迷惑をかけたな」

「いやいや、爆裂魔法を撃たせたのは俺ですし……」

「ごめんなさい、志貴。私もあそこで撃つべきではありませんでした」  
「その事についてはもう咎める気は無いよ。結果としては倒せなかったけど、注意はそっちにいったからね」

「それで志貴！ 爆裂魔法はどうだったのだ？ やはり、身がえぐられるような感じなのだろうかッ!? ああ……私も受けてみたいものだ……」

普通の人間なら木っ端微塵もいいところだろうが、あのデユラハンの剣を受けてなお立っていたことを考えると、こいつなら死なないかもしれないと思う自分がいた。

「ともあれ、一件落着だな」

それなら、ギルドで食事をとり、解散となった。話は他愛もないものばかりだったが、少しだけ気になるものがあった。

最近、ダンジョンで人型モンスターが倒れているらしい。

普通に考えたら、どこぞの冒険者が倒したのだろうが、これはそうではなかった。



モンスターからは血が1滴も流れていなかった。  
殴打や毒ならまだ生易しいだろう。モンスターから血液がなくなっているらしいのだ。

まるで、吸血鬼にでも吸われたかのように……

「あくまで噂の範疇ですよ？　噂に尾ひれがつくなんてこと良くありますからね」

めぐみんはそう言っているが、これは噂という形で済ませていい問題ではない気がする。

いつ、それが人に向くかは分からないのだ。

俺は吸血鬼を知っている。

ネロさんだ。

だけど、ネロさんは人間の血を吸う気は無い。そう言っていた。心配なのは、ネロさんが言っていた、もうひとりの吸血鬼だ。ネロさんとは知り合いらしいが、その吸血鬼が人の血を吸わないとは限らない。

あとで、詳しい話でも聞きに行くか……

「志貴、さっきの夢のことだけど、ちよつと気をつけておきなさいよ。少しだけでも、魔力を感じたわ」

「なんだアクア。まるで女神様みたいな言い方だな」

「失礼ねっ!!　私は女神よっ!!」

そういうわけで、解散してから例の魔道具屋に向かったが、既に閉店していた。店主さんはまだ帰ってきていないようだが、ネロさんはどこか出かけているのだろうか？

それからは、特にすることもなく宿に戻った。

——その夜

テシテシテシ——

ベッドの上で眠っていると、頬を叩かれているのに気づく。

「な、なんだ……?」

テシテシテシテシテシテシテシテシテシテシ——

目を開くとそこには白猫がいた。肉球で頬にパンチを繰り返して

いました。どこか、恨みがこもっていた気がするのは気のせいだろう。

俺が起き上がると、白猫はベットを降りた。

「君は……どうしたんだ、こんな時間に」

問うが、もちろん答えなんて返ってこない。返事を待つなんて、自分でもおかしいと思う。

白猫は窓辺に飛び乗り、じつとこちらを見る。

「……ついてこいっていうことか？」

自信があつた訳では無い。ただのカンだ。猫がそんなことを示すはずがない。だけど、その白猫は頷いているように見えた。

俺は短剣を手にし、着替えもせずの外に出た。宿を出ると、白猫がお出迎えしてくれた。

「本当に、君は不思議だね」

白猫はフイツ、とそっぽを向き歩き始める。ついて行けばいいのだろうか？

俺はその後を追って行つた。

「ここは……」

白猫を追いかけていくと、そこは街の近くの森であつた。

それは、なんの混じり気もない殺意。

ナイフを抜き、恐る恐る振り返る。

「初心者殺し……だったか……？」

それは、大きな黒虎のようなモンスターだった。初心者殺し。名前の通り、冒険者初心者では歯も立たないモンスターだ。

「な……なんだ……？」

初心者殺しは影に飲み込まれた。比喻でもなく、事実だ。

「む？ 遠野志貴。何故ここにいる？」

初心者殺しがいた場所の対角線上には俺の知っている人物が立っていた。

「ネロさん……今のはネロさんが？」

「その通りだ。私は吸血鬼だからな。概念が書き換えられ、吸血衝動自体は無くなりはしたが、餓えにはかなわないのでな。こうして、動

物の血液を頂いているという訳だ」

「そうだったん、ですね」

決定だ。噂の犯人はネロさん。人間に害はないということはほぼ確定だろう。これで安心だ。

「ところで、奇遇だな夢魔よ。主もこちらに来ていたのか」

「ええ、教授もお元気そうで何よりだわ。貴方もこっちに来ているなんて思いもなかったわ」

そこには白い少女がいた。その代わりに、白猫がどこにもいなくなっている。

白猫が白い少女？ 嘘だろ？ ファンタジーだからってなんでもありなのかこの世界はっ!?

いや、ネロさんと知り合いということは、俺の世界の住民か……俺の世界もファンタジーだったんだなあ……

自分の眼のことを柵に上げ、遠い目になってしまう。

「君は……?」

「私はレン。そうね、いうならばあなたの使い魔かしら」

レンという少女はそう言い切った。

「使い魔？ 使い魔ってあれだろ？ 俺は契約したつもりは無いぞ？」

「それは残念。だけど、あなたは私の契約者よ。まあ、実際のところあなたであってあなたでないのだけけれど」

俺であって俺でない。それは、聞き覚えがあった。

「平行世界の俺……ということか」

「ご名答。私としては不本意だけど、仕方ないからあなた側についてあげる。のうのうと死なれても困るし、あいつの頼みだし……」

これはアレか？ この娘はアレなのか？

「ふむ、ふむふむ。これは……分かっていてもクルな……雪原を抜けて、ここまで助けに来るとは余程のことということか」

ネロさん。そういう文化に詳しいんですかっ!?! ていうか、雪原って？

「な、何を言っているのよっ！ とにかく、分かったわね、志貴！」

とりあえず、頷いておく。何はともあれ、この娘は俺の見方らしい。「それにしても夢魔よ、なぜ主はこの森に遠野志貴を導いたのだ？」「簡単よ。ここ、私の散歩コースなんだねど、最近初心者殺しがこの森に住み始めたのよ。それを志貴に殺してもらおうと思ってるね。まあ、教授が食べちゃったみたいだけど」

あれ？ レンって娘、俺の使い魔なんだよな？　なんで俺が危険な目に合わされてるんだ？

「教授は……吸血の為だったわね。どうなの？　この世界は？」

「うむ、興味がつきんな。全く、あちらでの常識が、こちらでは非常識ときた。研究者にとつては楽園とだけ言っておこう」

ネロさんは御満悦の様子。

「そういえば、どうしてレンは猫に？」

「それは決まってるでしょ？　この姿であなたの部屋にいたらあなたに襲われるもの」

いやいや、流星にこんな小さな子を襲うことは無い。

え……？　なんでレンさんは顔を赤く染めてるの？

ちよつとまって？　平行世界の俺ってロリコンなの？　いや、たしかに可愛いとは思うけど、これは犯罪だぞ？　マジで手を出したの？

警察行きだぞ？

ちよつと、平行世界の俺を連れてこい。17分割にしてやる!!!

## 噂の吸血鬼を探しに

「はあ……」

ギルドの椅子に座って大きなため息をついた。

「どうしたんですか、志貴さん」

「いや、昨日は眠れなくてね……」

色々考えていた。レンが俺の使い魔であるということは分かった。理由もわかった。

だけど……

「ところで、志貴さん。その娘は？」

俺の隣にいる少女が問題なのだ。

「私はレン。志貴の知り合いよ」

昨日夜通し討論して、ここに落ち着いたのだ。こんな所で使い魔だとか、ご主人様だとか言われたらたまったものじゃない。

事の発端ら、正体も見せたことだし、明日からはクエストにもお供するわ。

というレンの発言だった。

正直にいうと、レンを連れ回すのは気が引けた。誤解を招く言い方かもしれないが、レンは間違いなく可愛い部類だろう。白い髪に赤い目。白い肌は人形のようなだった。実際は猫だったのだが……

そんなレンを連れ回すのだ。最初から連れ回していたのなら兄妹だとかで誤魔化せただろう。だけど、ひよこつと現れたら、俺がこの娘に何かしたという噂が立つ。

仮にも俺は、カズマ君のパーティーメンバーだ。間違いなく悪い噂が立つ。風の噂も75日というが……長い。二ヶ月ちよつとですよ？ 尾ひれがついて、俺まで変態扱いされるのはゴメンだ。

「そうなんだよ。この街に魔道具屋があるだろ？ その従業員に世話を頼まれてね」

ごめんネロさん。これ以外の言い訳を思いつかなかったんです。

「そうなのですか。私はてつきり犯罪者にジョブチェンジしたのかと思いましたよ」

よし、レンと話し合っていて正解だった。

「まあ、志貴なら大丈夫でしょ。どこかのロリニートとは違うし」

「ちよつと待てお前ら。もし仮にだ、俺がその娘くらいの子を連れてたらどうするつもりだ？」

「即通報します（するわ！）」

「うおおおおいっ!! 俺にだって事情はあるはずだろ!!」

「悪即斬です。近寄らないでください、ロリマさん」

「俺、そこまで信用がないのか……」

がつくりと肩を落とすカズマくん。まあ、今までの行動を考えると擁護できないのが事実である。

「ところで、レンちゃんのクラスは？」

「なんか、悪寒がするからちゃん付は辞めてくれる？ レンでいいわ、ロリマ」

「だから違うってば!! で、クラスはなんなんだよ？」

「私は幻術師（ソーサラー）よ」

これは、後から聞いた話だがソーサラーのクラスはプリーストの派生らしい。回復をこなしつつ、モンスターに幻術を見せ惑わせる。後方支援のクラスだそうだ。

「すごいわね、レン!! あなた幻術が使えるの!？」

「限られた環境でだけだけれど、そうなるわね。まあ、回復役にはなれそうにないけど」

「そうなのですか？ ソーサラーにはヒールなど回復魔法もあるはずですが」

「私の場合、幻術で回復まがいのことは出来るけど、実用的じゃないわ。私はどちらかと言うとアタッカーよりね」

「そうなのね。回復役は私に任せなさいっ！ なんとって私はアークプリースト兼女神なのだからっ!!」

レンの目がだんだん可哀想なものを見る目に変わっていく。レンの言いたいこともわかる。こんな真昼間から酒を飲んでいる女神なんているわけが無い。

「事実だ……」

レンにこつそりと伝える。

「え……」

レンが固まった。

「まあ、みんな信じてないから問題ない」

「そ、そういう問題なの？」

「そういう問題だ」

最近、カズマ君たちに毒されてきているのかもしれないと思う俺であつた。

「みんな揃っているな。少しばかり、手伝って欲しいクエストがあるのだが……ん？」

まだ来ていなかったダクネスがギルドに入ってきた。そして、レンを見ている。

「志貴、その娘は？」

「知り合いだ」

簡潔に、短く答えた。何も言わせるつもりは無い。

「そうなのか。てつきり志貴はいたいけな少女を監禁し、人前では言えないようなあんなことやこんなことを……」

前提条件が間違っていました。こいつに合わせるべきではなかったようだ。

「で、ダクネス。どうしたんだよ」

これ以上パーティーメンバーの妄想を加速させまいと、カズマ君な話を切り出す。

「ああ、昨日モンスターのお話をめぐみんなが話していただろ？」

「昨日？ あれですか？ 血を抜かれていたという」

「それだ。それなんだが、割と貴族達が気にしているな。私たちが調査に行きたいんだが、駄目だろうか？」

「それは、討伐ということなのか？」

討伐となったら少し困ったことになる。

「いや、現状として人に被害は出ていないからな。何が起こっているか。それを調査するだけだ」

だが、杞憂に終わったようだ。

「それってお金になるの？」

「ああ。調査だけだが、なかなか出してくれるそうだし」

「その話、乗ったわ!!」

これは酷い。何が酷いって、お金に買収される女神がだ。

「そう言ってもらえると助かる。みんなもいいだろうか？」

みんなも頷く。実際、あれはネロさんの仕事であって、みんなに害はない。それならば、簡単な仕事だ。何の問題もないだろう。

「それじゃあ、3時間後に出発だ」

一度解散となり、俺とレンは宿に戻ることにしあ。

「ねえ、志貴。正直に言うけど、今回ばかりは嫌な予感しかしないわよ」

ベッドに座るレン。

「なんでだ？ あの犯人ってネロさんだろ？ 危険も何も無いだろ」

「やっぱり……この馬鹿。ちよつと考えたらわかるでしょ。昨日、教授はどうやって初心者殺しを殺したの？」

レンはため息をつく。

「確か、影みたくのがこう、ニョキつと……」

「分かったみたいね。あれは影じゃなくて混沌だけど、そういうこと。教授は食人鬼。食べたあとは何も残らない」

現在わかったことがひとつ。このクエストは危険なのではないだろうか。

「今から断ることは……」

「あの子達が断ると思う？ せいぜい、足掻きましょう。ま、目星はついているけれど……」

「そうなのか？」

「ええ。確実という訳では無いけれど、路地裏同盟の下っ端かしら」  
路地裏同盟ってなんでしよう……？

時間後

「それじゃ出発だー!!」

カズマ君の掛け声に、おー！ と、みんなが返事をする。



今回向かうは、森の奥。昨日連に連れてこられた森の更に奥である。

「本当に、何か出そうな雰囲気だな……」

カズマ君の言いたいことはわかる。ここには光が入ってこない。全て、木々に遮られ、地面はジメジメとしている。

「なに？ カズマさんビビってるの？ プークスクス、この程度のところではビビるなんてさすがヒキニートね。安心しなさい。アンデッドが出てきても、この女神の私が退治してあげるから!!」

「うっさい、黙ってる!! ていうか、めぐみんはどこ行つた……?」

さつきまで付いてきていたはずのめぐみんが急に消えていた。あたりを見渡すが、あの派手な赤マントはどこにも見えない。

「ちよつと……アンデットの気配はしないんですけど!? あれよね？ 人数を確認していくうちに減っていくつていうあれよねっ!」

どんどん顔が青くなっていくアクア。お化けは大丈夫でも、怪奇現象は苦手らしい。

「あ、慌てるなアクア！ おーい、めぐみんどこだー!!」

さも平然としているカズマ君も脚が震えている。こんなところで、こんなことが起これば当然だろう。

「あ、やっと気づいてくれました。ここです、ちよつと出るの手伝ってもらつてもいいでしょうか?」

めぐみんは沼にハマっていました。

## 俺の罪

「あの屋敷から、アンデットの気配がするわ……」

一行が辿りついたのは、屋敷だった。蔦が垂れ、所々に苔が生えている。なんていうか、いかにもって感じた。

アクアがアンデットが中にいると言っているから、ここで間違えはないのだろう。しかし——

「これに入りますか？ 入るだけで呪われそうなのですが……」

「安心しろ、めぐみん！ 呪いなど私が受けてやる！ ああ、どんな呪いだろうか……ああ、そんなことっ!!」

「お前は黙ってる!! 一応、入ったところに敵やトラップは無いみたいですよ」

カズマ君の敵感知、トラップ感知の結果、すぐに吸血鬼と遭遇することはなさそうだ。

カズマ君は静かに扉を開け、中に忍びいる。俺たちはカズマ君について屋敷に入る。

「だ、だれっ!？」

吹き抜けになった二階から女の子の声がした。その人物は、ボロボロのローブを纏っていて、フードもかぶっている。そのせいで、体格は全くわからない。二階にいるせいで身長もよくわからない。今わかってるのは女性だということだけだ。

「ああっ！ あんたが吸血鬼ね！ 覚悟しなさいっ!!」

「え、ええっ!？」

「あ、こらー！ 逃げるんじゃないわよっ!!」

俺は大きいため息をついた。侵入には成功したものの、すぐに見つかってしまったところまでは、考えていた。吸血鬼と話ができるかもしれないなかったからだ。

「ただ、あの馬鹿（アクア）のことを完璧に忘れていた。

「みんな、あいつらを探すぞ」

「とりあえず、屋敷の中を探索することになった。

「レン、どうしたんだ？」

「……ちよつと考え事よ」

二人で廊下を歩いてみると、レンは難しい顔をしていた。

「今は気にしなくていいわ。とりあえず、あの吸血鬼に話を聞きましょう」

屋敷の奥に進む。すると――

「やめてくださいいっ！ 私が何をしたっていうんですか！」

ふと、女の子の声が出た。

向こうの部屋か？

「この世に生まれてきたこと自体が悪なのよ。いい？ あんたはここで裁かれるの。私でよかったわね、楽には殺さないわ!!」

扉を蹴破り、入ってみるとそこにはボロボロのローブに身を包んだ人物の胸ぐらをガツチリとホールドしているアクアの姿があった。

すごい悪人顔のアクア。これでは、どちらが悪なのかがわからない。

「ひい……ごめんなさいごめんなさい……」

ガタガタと震える女の子の声。その声には、聞き覚えがあった。

「弓塚……なのか……？」

忘れたい記憶。だけど、決して忘れてはならない。俺の後悔そのものが、そこにはいた。

「遠野くん……？」

「アクア、放してやってくれ。弓塚は俺の知り合いだ」

「志貴の知り合い？ あんた、パーティーメンバーに女神がいるのにそんなのとつるんでいたわけ？」

アクアって何でこんなにアンデッドが嫌いなんだろう。アンデッドからは好かれるくせに。

「こっちはこっちの都合があるんだよ。ていうか、放さないなら、その手を胴体から切り離すぞ」

アクアは力を弱め、弓塚はストーンと地面に崩れ落ちた。

「で、なんでさつきがこちら側に来ているのよ？」

「遠野くん、この子誰？」

レンは知り合いのように話しているが、弓塚はレンのことを全く知

らないらしい。

「んなっ?! 路地裏同盟に私を引き込んだのはあんたでしょうがっ!!」

また、路地裏同盟という単語。一体なんなんだ……?」

「えっ、えっ?! 路地裏同盟? なにそれっ?」

「……おかしいわね。質問を変えるわ。シオン・エルトナムという名前に聞き覚えは?」

弓塚は首をブンブンと横に振った。

「はあ……そういうことね。なるほど、このさつきは私の知っているさつきとは別人らしいわ」

「つてことは……」

平行世界の人間。いや、少し違う。この弓塚は俺と同じ世界から来た、俺が殺した弓塚だ。

レンも頷いているから間違いはないだろう。

「弓塚、これだけは言わせてくれ。その、本当にごめん。俺は……」

後悔はしないと決めた。だけど、俺にそんなことは無理だった。弓塚を殺した。その罪は一生俺が背負っていかねければならないのだ。

「それは死に際にも聞いたよ。あれは私の望んだ結果だよ。遠野くんは悪くない……それに、私は今幸せだよ。遠野くんにまたこうして会えるなんて思いもしなかったもの」

なんだか、とことん申し訳なくなる。

「ねえ、志貴。いいところを申し訳ないのだけど……私、かなりまずい間違いをしてたわ……」

レンはさつきよりも深刻な顔になっている。

「どういうことだ?」

「私が察知していたのは、さつきじゃなく、もうひとりの吸血鬼。言ってみるなら、さつきの親にあたる人物ね」

「え? 私の親?」

弓塚は驚いている。

「そう。あなたを吸血鬼にした吸血鬼、ミハイル・ロア・バルダムヨオン。その吸血鬼がここにいると思っていたのだけれど……」

「ここにいたのは弓塚だった。レンが言いたいのはそのう事だろう。」

「その吸血鬼って危ないのか？」

「危険ね。あいつは根っからの殺人鬼よ。迂闊だったわ……アクアは置いてくるべきだった」

「ちよつと、レン。私を仲間はずれなんて、罰当たりよ？」

「どういうことだ？」

「これは、あくまで可能性としての話だけど、アクセルの街が危ないわ。アクアがいれば、結界なりなんなりで防げたと思うのだけど、後の祭りね」

「アクアは仮にも女神だ。吸血鬼から街を守る術などいくらでもあっただろう。相手が嫌いなアンデッドだから尚更だ。」

「その、吸血鬼が危ないのは分かったけどどうしてアクセルなんだ？」

「狙いは？」

「そう、あなたは会っていないのね。でも、覚悟しておきなさい。おそらく狙いは志貴、あなたよ」

「レンは俺を指さす。」

「は？　なんで俺？」

「全く身に覚えがない。なんで俺が見ず知らずの吸血鬼に狙われなければならぬのだ。」

「あんたって筋金入りの馬鹿なのね。教授やさつきがどういう経緯でこちらに来たかは知らないけれど、一つだけ共通点があるじゃない」

「ネロさんと弓塚？　この二人の共通点は——」

「俺が殺した……」

「弓塚はこの俺自身が殺した。ネロさんは平行世界の俺が殺している。なら、その吸血鬼も殺している可能性は大いにある。」

「そう。殺された相手に殺意がないのは有り得ない。もちろん、さつきや教授は例外なんだけど……それで、デユラハンを倒したのは昨日。今日は志貴たちの噂でひっきりなしだったわよ？」

「だったら、俺がこの世界に來ていると知られてもおかしくないということか……」

その遠野志貴が平行世界から来た別人だというのは、向こうからしたらどうでもいいことだろう。他人から見たら、本人なのだ。

「よく出来ました。吸血鬼は基本夜しか動けない。例外がないことはないけど、ロアは今夜あたりアクセルを襲うと見て間違いないでしょうね。本当なら、来る前にここで潰すつもりだったんだけど、飛んだ貧乏くじだったというわけね。……って、志貴？ どこに行くつもり？」

部屋を出ようとしたところで、レンに止められた。

「決まってるだろ、アクセルに戻る。街が危険だ。それに、弓塚を吸血鬼にしたそいつを許せない」

「ふうん。正義の味方にでもなりたいのかしら？」

「そんなんじゃないよ。これは誰の為でもない、俺のためにする傲慢なんだから」

これは、俺のため。弓塚を吸血鬼にしたその吸血鬼に一言言ってやらないと気が済まない。

「と、遠野くん!! 私も行つていいかな……?」

「はあ!? アンデットが私たちのパーティーに? 寝言は寝ていいな

さいー!」

「アクア、お前を永遠にねむらせてやろうか?」

馬鹿は死なないと治らないというのは、本当のようで、アクアはその例のようなものだ。本当に死んだら治るんだろうか……?」

「ちよつと志貴さん、なんで眼鏡とつちやってるんですか? 冗談、冗

談ですよ? 女神の私を殺すなんて、冗談ですよ?」

「やってみるか?」

「本っ当に、ごめんなさい……」

とりあえず、ひとりで勝手にアクセルに戻るのは早急すぎるため、みんなと合流した。

「えっと、初めまして。弓塚さつきです。吸血鬼です……」

弓塚はどこか申し訳なさそうに挨拶をする。

「サツキ、ですか。宜しくお願ひします。吸血鬼って私たちとあまり変わらないのですね。我が名はめぐみん。紅魔族随一の魔法の使い

手にして、魔王を屠らんとするもの!!」

「えっと、めぐみちゃん?」

まあ、初対面ならこうなる。

「ちがわい! めぐみんだ! 名前に文句があるなら聞こうじゃないか!!」

「落ち着けめぐみん。俺は佐藤和真。よろしく頼む」

カズマ君はめぐみんを宥める。

「吸血鬼、だど……? わわわ、私はゆつくりと血を抜かれながら、抗いつつも力が抜けていき、どうすることも出来なくなつて報復しなければならぬのか……だが、いい!! なかなかの高シチュエーションだ!!!」

誰にもダクネスは止められない。一人で勝手に発情している。

「えっ……えっ!?!」

弓塚もかなり困っている。初対面の人によくもまあそんな変態発言が出来るな……

「おっと、すまない。私はダクネスだ。血が欲しくなったら、私から吸うといい」

「それは大丈夫です。どうも、こっちに来てからはそういう衝動は無くなりましたから。モンスターの血液でも生きていけますから、大丈夫です」

「そうか……」

ダクネスはあからさまに肩を落とした。どれだけ吸われたかっただろうか……

## 路地裏同盟の下っ端

森を出てみると、既に夜になっていた。アクセルの街に戻ってみると、冒険者が正門に集まっていた。

そして、それに対峙するように白いワイシャツをきた、ロングヘアの男。

殺人衝動さえないものの、思わずにはいられなかった。

コロサナイト——

こいつは、ただの悪。どうしようもないくらいの悪だ。ここで殺しておかないと、後でどうなるかなど、自明の理だ。それに、殺さないのなら、殺される——

直感的にわかった。あいつはやばい。

「やつと来たか、志貴。待ちわびたぞ」

やはり、この吸血鬼は俺のことを知っている。平行世界の俺が殺した、というのとは間違いらしい。

「お前がロアか……」

「うん？ お前はあれか、殺したやつに興味はないってパターンか。まあいいだろう。そっちにいるのはあの時に血を吸った女じゃないか。まさか、死徒と同じ程の力を得ているとはな。感謝してほしいな」

ロアは俺の隣にいた弓塚を見た。その言葉は俺を怒らせるには充分すぎた。

「感謝……だと？ 言いたい事はそれだけだな。一秒でも早く、おまえを殺すっ！」

眼鏡を外し、ナイフを抜く。

「そう焦るな、兄弟。しよっぱなから全開にしちまったら脳が破裂するぞ？」

あいつは直死の魔眼のことを知っている。それもそうか、俺と戦ったんだから……

「生憎、俺にそういう制限は無いんでね。お前はここで確実に仕留めてやる」



「いいね、相変わらずの寝ぼけぶりだ！

苛立ちを通り越して嬉しくなる！ さて、来いよ殺人鬼、あれからどれだけ腕をあげたのか、オレの体で確かめてやる！」

「そうか、それなら味わうといい」

『閃走・水月』で背後に移動し、『閃鞘・八穿』で分割する。これで終わりの筈だったが、間一髪のところを察知され、距離を取られる。

「ほう、流星は志貴だ。七夜の体術か。面白いじゃないか。それっぽいことはやっていたが、あの殺人鬼と同じとは恐れ入った。だが、俺と同じでは通用せんっ!!」

ロアは手を振り、雷撃を飛ばす。それは、一直線に俺目掛け飛んでくる。

「ちっ!!」

雷撃を殺した。

「相変わらずその能力厄介だな、志貴よお。無制限とは恐れ入る」

どちらが厄介か。あの雷撃こそ厄介だ。直進しかないというのは救いだが、とにかく早い。今のはよく反応できたと思う。森から出る前にレンから情報を聞いておいて正解だった。

「あんまり、私を無視するなあああっ!!」

轟音とともに、地面にクレーターができた。その中心にいたのは、弓塚さつきだった。

なんとという馬鹿力……

それに、あのスピード。レンたちのところから、瞬間移動さながらの速さだった。水月と同じくらいか……？

「危ないな。俺が死んだらどうするんだ？」

「絶対にあなたを殺す。私だけじゃなくて、遠野くんまで殺そうとするなんて許さない!!」

弓塚から出る殺気。肌がピリピリする程のものだった。

「弓塚！ 危ないから下がってろ!!」

「嫌っ！ 私は私のために戦うの。遠野くんが戦ってくれてるように……私は志貴くんが死ぬのなんて見たくない!!」

「弓塚……」

何も言い返せない。自分を殺した相手を憎悪せず、俺を殺そうとしたことに憤怒している弓塚に俺は何を言えばいいのかわからない。

「おうおう、見せつけてくれるじゃねえか。それにしても、女。よくもまあ、ここまで吸血鬼の力を制御できるようになったな」

「私は……力を暴走させちゃって迷惑をかけた……だから、頑張ったんだ。この破壊の力を、みんなを守る力にできればって!!」

「力は所詮力だ。みんなを守るための力あ？ 笑わせるなよ、女。力つてのは、人を傷つけるためにある。履き違えるなよ？ こんなふうになあつ!!」

裏拳が弓塚に当たる。

「うわああああ」

「弓塚っ！ 大丈夫か？」

飛んできた弓塚をキャッチする。

「ととと、遠野くん!? だ、大丈夫！ ありがとうございます!!」

弓塚は顔を朱に染めながら、地面に降りる。

「俺達だって志貴さんの仲間だ！ やるぞ、みんな！」

「ふん。雑魚は黙ってろ」

雷撃がカズマたちめがけ降り注いだ。

「早急ね、吸血鬼。もう少し余裕を持ったらどうなの？」

頭上に雪の結晶のような氷の盾が出現し、雷撃を防ぐ。

「今のはレンがやったの？」

「ええ、流石に直撃はしたくないでしょう？」

「あの雷撃、受けてみたいっ!! レン、次は貼らなくていい。私が私が耐えきってやろう!!」

遠くからダメな発言が聞こえてくる。なんか、凄いイヤだ。なにあの人受けたがってるの？ 死にたいの……？

「さつきから気になっていたのですが、あの吸血鬼はプリーストなんですか？ 雷系の魔法とは……なかなかカッコイイです!! ですが、あのような魔法は知りませんね。興味はありますが、やはり浮気はできません」

めぐみんもめぐみんで一人で葛藤しているし、本当にこのパー

「ティーはどうなんだろう……」

「お前ら、真面目にやれっ!! クリエイト・ウォーター! フリーズ!!  
からのステイール!!」

「……おい、それを返してくれないか?」

カズマ君が持っていたのは黒いパンツだった。それは、紛いもなく、ロアが履いていたものだ。

「ブークスクス。カズマ、アンタいくら裸ワイシャツに憧れるからって、男を裸ワイシャツにする必要ないんじゃない?」

「おどれは黙つとれ!! ていうか、あいつなんにも持つてないのかっ!?!」

「俺に武器なんてものは必要ない。この拳さえあればどうとにでもなる。いつかはナイフなんてものも使つてたが、今は線も見えないからな」

ロアはカズマ君が作った氷を何も無かつたかのように壊す。

「今度は私が相手だああああ!」

ダクネスの剣戟。だけど、それは当たるはずもなく、当たりの岩を切り裂くだけだった。

「……ノーコンが。これでも食らつてな。天の崩雷!!」

ロアから放たれる雷撃。ダクネスはモロに受けてしまう。が――

「貴様の雷撃はそんなものかっ!! もっと痺れさせろ!! こんなんじゃない、少しも興奮できんっ!!」

全くの無事。どれほど、防御系のスキルにポイントを降っているのだろうか。呆れを通り越して、素直に賞賛してしまうほどだ。

「くそっ……何なんだこいつは……」

「俺の仲間、だ。やつと隙を見せたな、ロア」

少し、ロアを気の毒に思いながらも、背後から左肩を殺した。

「ふははははは!! いい、いいぞ志貴い。いいだろう、本気を見せてやる。固有結界・過負荷(オーバードロード)!!!」

突然の、ロアの周りが光り出す。

あれはやばい……

すぐに分かった。が――

「させない!! 枯渴庭園!!」

弓塚がその光の中に飛び込んでいく。

「なに……!?! 力が……魔力が抜けていく、だと……?」

弓塚が何かを叫んだ途端、光は消えた。光の中止にいたハズのロアは膝をついていた。

「あなたは……許さない!! これが、みんなを守る力……めぐみんちゃん、今です!!」

「この時を待つてました!! われは輪廻から外れしもの。生には生を、死には死を。故に、死したものを死に返したもう。その死は偶然でなく必然。その死に刻み込め……エクスプロージョンツ!!」

凄まじい爆発が起こった。大地はえぐれ、地形が変わる。猛烈な風が俺達の間を吹き抜ける。

「無様ね、ロア。志貴にやられただけでなく、子にもやられるなんて。さすがの私も笑わずにはいられないわ」

「黙れ夢魔が。貴様ら路地裏なんかはいずれこの俺が破滅させてやる……っ!?!」

逃げようとするロアの足元を凍らせるレン。普通の状態なら壊して抜けられたはずだが、左腕を殺されバランスを失い、爆裂魔法を直撃したロアは抜け出せないでいる。

「残念だけど、逃がしはしないわ。あなたに次はない。出番よ、アリア」

「仕方ないわね!! ここで終わりよ吸血鬼!! セイクリッド・ターン タンデッド!!!」

聖なる光がロアを包み、これにて鬼退治は終結。呆気ない? こんなものだろう。レンいわく、路地裏同盟の下っ端だ。もともと、コンクリートに潰されて死んだらしい……

これ以上は何も言うまい、何だかあの吸血鬼が可哀想になってきた。

ルド

「カンパーイ!!」

ジョッキを打ち合い、ガラスの響く音がギルド内に響きわたる。

「遠野くん、私まで良かったのかな……?」

「いいんじゃないかな。誰も気にしてないだろう?」

「うん。だけど……」

弓塚は恐る恐るアクアの方を見る。そのアクアはと言うと、不機嫌である。

「……たしかにあんたは吸血鬼だわ。だけど、その力の使い方っていかか……ああ、もうっ!! ……認めてあげるわ」

「え……?」

「だから、認めてあげるって言ってるの!! あなたの本音を聞いて、それを無下にする女神なんて下衆以下よ。……分かった!」

弓塚は首をブンブンと縦に振る。

「なんだアクア、そんなことでイライラしてたのか」

カズマ君はニヤニヤしながらアクアを見る。

「うるさいわね、ヒキニート! 男裸ワイシャツに憧れがあったなんて驚いたわ」

「そうですね。カズマは女の子が大好きなド変態かと思っていました  
が、男の子も大好きなド変態だったんですね」

パーティーだけでなく、ギルド全体からの視線が冷たくなる。

「いや待ってっ! お前ら本当にふざけんなよ! 変態はこいつだけで十分だろうが!」

「何を言うか! 私は変態ではない! ただ、自分の快樂に素直なだけだ!!」

それを変態と言わずしてなんというのだろう。

カズマ君も冷たい目になっている。

そんなこんなで、宴会は終わった。

「遠野くん、今日はありがとう……」

「志貴でいいよ。こつちじや苗字は違和感しかないからな」

こつちに來てからは、苗字で呼ばれたことなんてなかったから、名

前で呼んでくれた方がありがたいというのが事実だ。

「……それじゃあ、私のこともさつきって呼んでくれたら嬉しいな……」

「分かったよ。それで、今日はどうするんだ？」

また、あの屋敷に戻るといふのなら少し考えなくてはいけない。宿を借りる金は持ってないだろうから、俺が払えばなんとかなるだろう。

「そのことなら心配いらないわ」

「レン？ そういえば、ギルドにいなかったけどどこにいたんだ？」

「さつきの宿探しよ。あの屋敷でもいいかもしれないけど、流石にね。その格好もどうかしないといけないし」

さつきの格好はローブの下に俺な通っていた学校の制服だ。もちろん、この世界には似つかわしくない。

「というわけで、行くわよさつき。いいわね、志貴？」

「もちろん。さつきを頼むよ」

「ええ、任されてあげるわ」

そう言つて、踵を返すレン。

「それじゃあ、志貴くん、またね！」

レンに付いていきながら、振り返り手を振るさつき。その姿はただの女子高生にしか見えなかった。

「ああ、また」

二度とさきようならなんて言わない。これからは、いつでも会えるのだから――

「志貴、ずっと気になっていたのですが、さつきとはどのような関係なのですか？」

なるほど。さつきから暖かい視線を感じていたが、見られていたというわけか。

「さてね。めぐみんにはまだ早い」

「私を子供扱いしないでください。二人は付き合ってるのですか」

「俺はさつきを振ったから、さつきが今どう思っているかなんてわからないよ」

多分、さつきの好意は変わらないままであろう。そんなのは、あの顔を見たらわかる。

「だけど、俺はそれに答えられない。」

「そうですか。だそうです」

「え、なに？ 志貴、さつきに告られたの？ ヒキニートとは違ってリア充してたのね」

「うむ。だが、さつきもいい子ではないか。志貴の周りにはあれよりもいい子がいたのか？」

出てきてのは、アクアとダクネス。しかし、どうして女というのは恋バナが好きなのだろうか。

「とびっきりの、いい妹（おんな）がいたよ」

思い出すのは、その怒った顔、困った顔、呆れた顔、拗ねた顔、そして、とびっきりの笑顔。

あいつは、今どうしているだろうか――

いい人が生きてるか死んでるかなんて関係ない

翌日、俺達は大変な事実を知ることになった。

俺達。パーティーは借金を背負うこととなったのだ。合計、3千万。というのも、めぐみんが爆裂魔法を古城に撃ち込んでいた為である。あのデユラハンを倒した報酬を差し引いて、この額。

一体どれだけするんだ、あの古城……

というわけで、借金を返すために俺達は嫌でもクエストに行かないといけなくなったのだ。

「どのクエストがいいかな……」

「これなんていいんじゃないか？」

カズマ君の間に俺が指さしたのは、ゾンビメーカーの退治。最近、墓地に悪霊の類が多く住み着いているらしい。その根源と思われる、ゾンビメーカーの退治をすればいいという事だ。

うちには自称女神もいることだし、問題は無いだろう。何故かわからないが、アンデッドに相当嫌悪感を持っているようだから、放り出すこともない。割といい仕事である。

もつとも、その女神様は日も登っているうちから酒を飲んでいる訳だが――

……うん、なんか慣れた。エリス様には悪いが、女神様つてのは元々ああいうものなんだ。

そう言い聞かせる。

カズマ君も同じようで、呆れた顔でアクアの方を見ている。

「ふうん、墓地に出現するゾンビメーカーの討伐ね」

「どうしたんだ、レン」

レンがまた考え事をしている様子。さつきの時のことを考えると、少し無視出来ない。

「少し思うところがあってね。まあ、気にしなくていいわ」

「気にするなって言われてもな……」

「ま、ネロの時みたいに、誰かが死ぬような事じゃないから大丈夫よ」  
レンの考えていることがわからない。いや、もともとよく分からない



い子ではあるのだが……  
分かってるのは、夢魔でツンデレということだけだ。

の夜

俺達一行は墓地に向かった。もちろん、クエストを進行するためだ。

「敵感知に引っかかったな。いるぞ二体、三体、四体……あれ、多いな……」

カズマ君は敵感知のスキルを使い、墓地の様子を探ったようだ。

「そうなのか？ ゾンビメーカーっていうくらいだからゾンビの軍団でもいるかと思っていただけ……」

「いえ、それは有り得ないです。カズマには教えたのですが、ゾンビメーカーが生み出すアンデッドはせいぜい2〜3匹程度です。あの、私少し嫌な予感がするので帰ってもいいでしょうか？」

墓地に数十数百のゾンビでもいるのかと思っていたが、数はたかが知れているらしい。

実際、それくらいの数なら俺ひとりでもどうにかなるし、今回の主役はアクアになるだろう。となれば、めぐみんは帰ってもいいのだが

「アンデッドが多いなら、爆裂魔法も映えるだろうなあ」

「早く行きましょう、カズマ!!」

カズマ君の一言により、俄然やる気になったようだ。身代わりが早いな……

「あれが、ゾンビメーカーか？」

墓場の中央で青白い光が走っていた。

よく見るとその青い光は大きな円形の魔方陣が出しているようだ。その傍らには黒いローブを着た人物がたっている。

「あれゾンビメーカーじゃなくて、リッチーじゃない？」

アクアが急に前へ出る。

「まじか……?」

カズマ君が問う。

そ

リッチー？ リッチーだろ？ たしか、魔法使いや僧侶が不老不滅のためにアンデッドとなつたものだったか？

「まじまじ、それにしてもなんでリッチーがこんなところにいるのかしら？」

アクアはその場で両腕を組む。

「やけに冷静だな、アクア。お前なら飛びかかると思つたんだが……」  
先日、さつきを見つけるなり追いかけていたから、問答無用で浄化しに行くと思つたがそうでは無かつた。

「うう……それは、私だつて思うところがあつたのよ。アンデッドといえど、そいつにも事情はあるでしょ？ まずは話を聞こうと思つてね」

「おい、お前なんか変な薬でも飲んだか？」

カズマ君はマジでアクアのことを心配している様子である。

「飲んでないわよっ！ ほら、行くわよ!!」

アクアも一応は女神ということなのだろうか。これも、きつとさつきのおかげだろう。

「リッチーがこんなところに現れるとは不屈千万！ 成敗してくれるわ!!」

前言撤回。人の行いというものはそうは簡単に変わらないのだろう。

「や、やめてええええええ！ いきなり現れて、なぜ、私の魔法陣を壊そうとするの!?! やめて! やめてください!」

リッチーは魔法陣を踏みじめるアクアの腰に、泣きながらしがみついた。

「やめてください! この魔法陣は未だ成仏できない迷える魂たちを天に返しているだけなんです!」

確かにリッチーの言う通り、青白い人魂のような物が魔法陣に入るとそのまま青白い光とともに、天へと吸い込まれていく。

「リッチーのくせに生意気よ! 話くらい聞いてやろうと思つたけど、そんな気もなくなつたわ! 見てなさい、アンタ共々墓地まとめて浄化してあげるわ! ターンアンデッド!!」

墓地全体が聖なる光に包み込まれる。リッチーもその光に包まれ

「か、体が消えるっ！ 止めて止めて、私の体が無くなっちゃう！ 成仏しちゃううううう！」

号泣しているリッチーの影がだんだんと薄くなっていく。

「あつはつは、愚かなリッチーよ！ 自然の原理に反するもの、神の意に背くアンデットよ！ さあ、私の力で欠片もなく消滅しなさい!!」  
これではどちらが悪なのかわからない。このリッチーにも言い分はあるようだし、一方的に、というのは好きではない。

「やめんか、この駄女神」

ナイフの柄の底でアクアの脳天を強打する。アクアはというと、その場にしゃがみこみ、脳天を両手で抑えている。

「大丈夫か？」

「ええと、はい。ありがとうございます……」

さつきまで消されそうになっていたのに、リッチーは俺に微笑む。

……別に可愛いとか思っていないからな。

「なんだか楽しそうね、ウイズ」

「それに楽しくないですよ！ 死にかけたんですからっ！ って、レンさん？ どうしてここに？」

どうやら、ウイズというリッチーとレンは知り合いらしい。

「あなた、死人でしょ？ 私がこいつらのパーティーに入ってるって言ったらわかる？」

「レンさんの話してたパーティーってこの人たちのことだったんですね」

ウイズさんは納得がいったようだ。

「そういうこと。で？ あんたがここに来てたのは知ってたけど理由を聞こうじゃない？ もちろん、志貴たちにもわかるようにね」

「はい。私は見ての通りリッチー、ノーライフキングなんてやってます。アンデットの王なんて呼ばれるくらいですから、私には迷える魂の話が聞けるんです。この共同墓地の魂の多くはお金がないため口々に葬式すらしてもらえず、天に還る事なく毎晩墓地を彷徨っていま

す。それで、一応は、アンデッドの王な私としては定期的にここを訪れ、天に還りたがっている子達を送ってあげているんです」

ノーライフキング、ね。向こうに敵意がないのが幸いようだ。たぶん、本気で戦ったら五分といったところか……

「なるほどな。だけど、そういうのは町のプリーストに任せればいいんじゃないか？ それの仕事なわけだし」

カズマ君の疑問に、ウイズが言いにくそうにチラチラとアクアを見る。

「そ、その……この町のプリーストさん達は拝金主義……お金が無い人たちは後回し、と言いますか……」

ああ、なるほど。そういう事か。誰だって金にならない仕事なんてしたくはない。こういう、金を持ってない人々の墓地は後回しにされて当然というわけだ。

「理由はわかったよ。だけど、浄化するのにアンデッドを生成してたら本末転倒じゃないか？」

「あの……それなんですけど、私がここに来ると私の魔力に反応して勝手に目覚めちゃうんです……」

「それなら問題ない。うちのアークプリーストがその仕事を請け負う」

ウイズさんを帰した後、有無を言わず、アクアに働かせました。

「で、このクエストはどうなるのでしょうか？」

「あつ……」

ゾンビメーカーの討伐だったのだが、俺達はゾンビメーカーを狩ってはいない。となれば、クエスト失敗というのは当然だろう。

俺達はギルドで解散した。

「にしても、ウイズさんがあの魔道具屋の店主さんだったわけか。知っていたならなんで教えてくれなかったんだよ」

ウイズさんからもらった紙を見る。書かれているのはやはり、あの魔道具屋だった。

「聞かれなかったからよ。そもそも、ウイズになんの用があったの？」  
「色々聞かないといけないことがあるんだよ。にしても、店を構え

るアンデッドって……」

一体この世界、何がどうなっているんだ……？

「それを言ったら手伝っている教授だってそうでしょう」

店主がリツチーで店員が吸血鬼。そんな店が駆け出しの街なんか  
にあつていいのかはいささか疑問ではある。

トメイト!!

「トマトが食べたいよお……」

それは、さつきの一言だった。俺はウイズさんの店に遊びに来ていた。特に何を買いに来たわけじゃない。無駄に高いし、何に使うのかわからないものばかりだし。

ちなみに、さつきはウイズさんのところに居候することになった。レンの手回しのお陰だろう。しかし、この店、本当に大丈夫なのか……？ リッチーに吸血鬼が二人。普通にやばくないか……？

「トマト？」

「うん。なんか、最近モンスター血液ばかりで飽きちゃったの」

そもそも前提が違う気がする。吸血鬼だろ？ 赤けりやなんでもいいのか……？

「そういえば、こっちに来てからトマトは見てないな」

「南アメリカのアンデス山脈高原地帯原産のナス科ナス属の植物か。こちらでは相当高価なものようだ」

教授が奥から出てくる。

「高価な？ どういうことですか？」

「1玉50万エリスとなっているようだぞ」

「は……？」

意味がわからない。そういえば、キャベツは売却価格が1万だった。あれも、普通に買えば高価なものだ。

「トマトは捕獲が難しいですからね。あれを捕まえるのは至難の業です」

ウイズ談。捕まえる？ もう何か、この世界の野菜ってどうなっているのか本当にわからない。俺らの常識はどこに行ったのやら……

「そういえば、今つて丁度トマトの季節ですね」

『緊急クエスト、緊急クエスト!! 冒険者の皆さんは至急ギルドに集まってください! 繰り返します——』

……もうなんか、嫌な予感しかなかった。

ルド

「志貴さーん、こつちです！」

「もうみんな集まってるのか？」

「はい。あ、さつきさんも一緒なんですね」

「うん、宜しくね」

「いやあ、今年もこの季節ですか。あ、私は今回ここで待機するのでヨロシクお願いします」

「珍しいな。いつもなら爆裂魔法を撃てるからウキウキしてるだろ、お前」

「今回はワケが違いますからね。まだ死にたくはありませんし……」

「死っ!？」

「大丈夫よ、めぐみん。なんたつて私がいるんだからっ!!」

「あ、いえ。そういう訳ではなくてですね……」

「ああ……早く来い……トマト……私をもつと……!!」

そんな中、ダクネスの興奮は相当なものだった。なんか、キャベツの時よりやばい。あの変態と同じパーティーだとは思われたくない。「とにかく、本当に私は行きませんから。志貴、さつき、カズマ、キャベツは飛んでいましたが、トマトは降ってきます。気をつけてください」

「みなさん！ 来ました!! どんどん狩っちゃって下さい！」

そう言われて、勢い良くギルドの外に出る——者はいなかった。ただひとりを除いて……

「……なんだこれ」

ギルドの外はまさに地獄絵図。世界は赤一色に染まっていた。空から雨の如く、トマトが降っていた。

「素晴らしい……素晴らしいぞっ!!」

あつという間に全身が真っ赤になるダクネス。なんていうか、グロイ。

これが、赤い雨水であるなら、ザーという効果音だったのだろうが、相手はトマト。ベチャツ、とかグチャツという何かが潰れる効果音しか聞こえてこないのだ。

「ダクネスに続けー!!」

ギルドを出た冒険者は脳天にトマトを受け、次々に倒れていく。  
「……」

俺とカズマ君はそれを唾然と見るしかなかった。さつきなんて、目に涙を浮かべている。

「トマトは人間に食べられるくらいなら、殺して自分も死ぬというわゆるヤンデレのようなのです」

めぐみんの説明。

「意味がわからないぞ……なんでトマトがヤンデレなんだよ……」

「冒険者の知識がどうか聞いたことがありますか……」

「日本人のバカヤローツ!!!」

そう叫ばずにはいられなかった。

このすば

どうにかこうにか外に出た。

いやもう、体中がトマトの残骸だらけ。考えてみてほしい、トマトが全力で人間に当たっていく姿を……

無理? いや、トマトが人間に当たった瞬間、弾けるんだよ。グチャツ、とかいいながら。

「こつのおー!」

さつきはさつきからパンチでトマトを潰している。これもこれなんかグロい。トマトがさつきの拳に当たった瞬間、鮮血(汁)を吹き出して、潰れるのだ。なんかもう、見てはいけないもののように感じる。

かくいう俺もなかなかうまく捕獲できていない。状態を良く捕獲しようとする、降ってくるトマトのスピードを殺した上で、捕まえなくてはならない。それが出来なければ、トマトは潰れてしまう。

「なんだ、簡単じゃない」

レンの頭上には氷の盾。足元を見ると、氷漬けにされたトマトが山のように転がっていた。

こういう時、魔法っていうのは便利だよな……

「店主よ、こつが稼ぎ時だ」



「分かっています、ネロさん!!」

魔道具屋も、レンと同じようにトマトを凍らせ、新鮮なまま捕獲しているようだ。

「カズマ！ レンたちと同じことをすれば稼げるわよ!!」

「任せるアクア！ フリーズ!!!」

現実には上手くいかないものである。フリーズによって、さらに固くなったトマトがカズマ君とアクアの頭上に降り注ぐ。

中途半端に凍ったトマトは凶器であり、消耗品であった。地面に当たった瞬間に、砕け散っている。もちろん、アクアとカズマ君はそれに当たって相当のダメージを受けているようだ。

哀れ……

しかし、斬つてもダメ、殴つてもダメ、蹴つてもダメというのはタチが悪い。一部の冒険者はネットなどを張っているが、それはトマトによって突き破られている。一部捕まえられそうになるが、捕獲されたトマトが降ってきたトマトに潰されて結局無駄になっているようだ。

本気になったトマト、恐るべし……

今回は経験値と思つて割り切った方がいいかもしれない……トマトで金儲けするという手段は持ち合わせていない。

「アクア！ 水だ!! プールを作れば捕獲できる!!」

なるほど。カズマ君はやはり頭の回転がいいらしい。水ならばネットと違い、傷つけることもないだろう。

「任せなさい!! セイクリッド・クリエイト・ウォーター!!」

天より降り注ぎし、洪水。もはや、天災の域だった。水の女神とは、伊達ではないらしい。

「俺はプールを作るつて言ったんだよ！ なんでこの量を——うわあああああああ！」

トマトの鮮血だらけだった街は、綺麗になった。街の外には新鮮なトマトが転がっている。どうやら、気絶しているらしい。

しかしその日、街が半壊した。

のすば!!

トマトはなかなか高く売れ、俺達は普通なら小金持ちを通り越し、大金持ちだった。

だが、街を半壊させたアクアのいる俺たちパーティーは連帯責任で借金を負うこととなった。合計1億。前途多難もいいところである……

「ハア……トマトになぶられ、洗濯されるとは……今までの中でも最高だったぞ……」

これは、ある変態騎士の言葉であった。

## レンと不思議なNECO

Side Ren

「あれ……嘘でしょ？」

街を散歩していると、有り得ないものを目にした。私は目を擦り、ソレを見直す。なんで？　なんであいつがこの世界にいるの？

それは、二頭身の二足歩行をする生物だった。

「おー、ツンデレエ。お前、こんな世界にいたのかにやー？」

会いたくもない物体。もう二度と関わりたくもなかった生物(なまもの)がそこにいた。奴の名はネコアルク。概要はWikiでも頼ってほしいところね。説明もしたくないわ……

「なんであんだがこの世界にいるよっ!!」

「我がグレートキャッツビレッジの科学力をもってすれば容易いこと！　ところでツンデレ、遠野志貴はどこにいるのかね？」

もう意味がわからない。頭が痛くなる一方ね……

こいつら、志貴を探しているようだけど、何を考えているのか全くわからない。表情を見ようにも、顔はキモイから見たくないし……

「遠野志貴？　なぜそんなやつがこの世界にいると思うのかしら？」

「あちし達のリーダーを舐めないでいただきたい。隠してもいいことないぜ？　お嬢さん」

やばい。本当にやばい。特に私に殺人衝動なんてものはないのだけど、どうしても殺したくなった。

「うるさいわね。黙りなさい」

鋭利に尖った氷の礫を生物に向け放つ。

「これで大丈夫でしょう……」

「本当にそう思うのかにやー？　しかし、早急過ぎやしないかい？」

後ろからそいつはニョキつとあらわれた。

「くっ……流石に1匹じゃないというわけね……」

「そーいうことだぜえ、ツンデレ。まあ、しかしなんだ、七夜つちはどうした？　とうとう捨てられちゃった？」

「違うわよっ!! 所要よ、所要。だいいち、あんた達には関係ないでしょ!!」

こいつらと話していたら、こちらがイロモノになりかねない。もう、無視よ、無視。

私は氷の礫を再び生物に放ち、踵を返した。

---

—— ウイズの魔道具屋

「はあ……」

「どうしたんですか、レンさん。なんか疲れてるみたいですけど」

さつきがお茶を出してくれる。ウイズはどうやら仕入れに出ているらしい。仕入れる度に、返却しているネロとさつきの身にもなってあげて欲しいのだけど、あれは一種の才能だろう。

「少し会いたくない奴に会ってしまった……」

ティーカップをソーサーに戻し、再びため息をつく。

「夢魔よ、会いたくない輩というのは?」

「教授も知っているでしょ? あのネコたちよ」

「なんと。猫27キヤットがこの世界に?」

「私、あいつら苦手なのよ……」

カニを食べられたことは忘れもしない。あ、なんかだんだんと腹が立ってきた。

「あの、猫27キヤットって……?」

「バカの集団よ」

さつきには悪いけど、説明することすら馬鹿らしい。

「恐らくそのネコは遠野志貴を狙っていたのだろう? 夢魔よ、主の元に戻らなくてもよいのか?」

「……どうでしょうね。まあ、アイツも強いし私がいなくても問題ないでしょう。でも、しょうがないわね。万が一負けでもしたら、使い魔の私が恥ずかしいもの。仕方ないから、助けに行つてあげるとするわ」

現実逃避のため、ここに来たのはいいけど、やはり心配だ。

店を出る時、さつきと教授がニヤついていたのは気になるけど、今はそれどころではない。多分、この時間なら志貴はギルドにいるだろう。

「やっぱり……」

冷たい目を志貴に向ける。

「ちよつと、志貴さん!? なんで、アクアとめぐみんを口説いてるんですかっ!? こいつらもまんざらじゃないような顔しやがって!!」

「志貴は一体どうしたのだ!? 私の望む言葉を次々に……ああ、なんて素晴らしいんだっ!!」

もはや手遅れだった。私が悪いの……?」

「どうしたんだい、レン。可愛い顔が台無しだぞ?」

遠野志貴は反転していた。あいつら、前使っていた、ネガポジウム光線（2Pキャラ作成光線）を使ったのね……

「う、うるさいわね! あ猫たちはどうしたのよっ!!」

「アイツらなら、速やかにご退場願ったよ。しかし、斬ってもダメ、潰してもダメとは困ったがね」

やれやれ、とオーバーなボデイランゲージ。

「貴方、今の状況を理解してる?」

「ああ、もちろん。俺は遠野志貴の使われていない部分。七夜の時の記憶と言うのが正解か。しかし、最近は表側も七夜体術を使っているようだし、俺自身薄れてきているというのも否めないが」

それは、今の志貴は遠野志貴ではなく、七夜志貴であることを示していた。

「で? いつ戻るの?」

「さてね。いいじゃないか。俺は一時の夢。楽しもうじゃないか」

以前は割と時間がかかった気がするけど、まあ良しとしましょう。あの生物達は何の目的で志貴を反転させたのかしら……

まさか、またヒロイン乗っ取り計画を……?」

まさかね……? こんな世界に来てまでそんなことを企む?」

……あいつらなら考えられる……

もう、嫌になつてきたわね……

「おうおう、ツンデレエ。どうしたんだい？ あちしが相談相手に  
なつてやろうか？」

「死ね！ 不細工ネコ!!」

今度は氷漬けにする。

「ねえレン、その猫はなんなの？」

「憎き敵よっ!!」

## レンと不思議なNECO2

「いい？ この不細工には関わらないことをオススメするわ」

そう言つて、氷漬けになったブサイク猫を砕く。

「関わった場合は犯しても構わないのだろう？」

「その表現にはちよつと問題があるけど……問題ないわよ、殺人貴。それだけ殺したいの？」

「これでも欲求不満でね。めぐみんとダクネスは人間。人外のアクアは女神で殺せそうもなくて嫌になる。まあ、あのクルセイダー様に関しては俺には殺せそうにないが……」

確かに、ダクネスは殺しても死にそうにない。あれは七夜にとつても苦手なタイプらしい。

「なんだ志貴！ 何か用なのか!？」

「……」

「ここに来て放置とはっ!! はううっ!!」

変態は放つておこう……

「それで？ 本命は誰なの？」

この世界に來た遠野志貴の本名は遠野秋葉らしい。真祖のことも知らないらしいし、私の知っている志貴とは違う人生を歩んできたに違いない。そんな人物の反転の本名というのは、気にならなくもない。

「なんだレン。そういうのに興味があるお年頃か？ ……そうだな。

俺が生涯で本気で愛したのはただ1人だけだ。他はありえないさ」

「ふうん。それは、殺したいという意味で？」

七夜の場合、殺すことこそが愛情表現になり得る。そこはしつかりと聞いておかなければならない。

「なるほど。レンは俺のことをよく知つてると見た。だが、いいや、まさか。本気で恋をしたんだよ。笑うなら笑えばいい。ガキみたいだと」

私は知っている。七夜志貴が遠野志貴になる前、志貴を屋敷の離から連れ出した人物を……志貴救った人物を……

なんだ、こいつは私の知っている七夜となんら変わらないんじゃない。違うのは遠野志貴だけという訳ね。

「その子にしてみたら迷惑と思うけど?」

あの子にフラれたのは別の七夜だものね。志貴がいた世界の翡翠はそのところどころ考えているかは少し気になる所ではある。

「いいんだよ。俺は白昼夢みたいなものだからな。この恋は奥深くでしまっておくとするさ。さて、そろそろあの猫たちの詳細を聞こうか」

「あれはただの害よ。最悪のね。無視したらいいんだろうけど、あいつらは放置しておいたら何をしでかすか分からないし……反転した時になにか聞いてないの?」

あいつらのことだから、なにか話しているはずだ。それが分かれば、なにか先手を打てるかもしれない。

「いや、七夜つちを呼んだ理由、わかれ? と言われたが、さっぱりだ。向こうは俺のことを知っているみたいだったが、こちらは知らないものでね」

「やっぱり馬鹿は馬鹿なのね……これは予想だけど、あのブサイク猫たちは扉か何かを使ってるんじゃないかしら。どこでもド○みたいなの……」

例の喫茶店にあったような肉球マークの付いた黒いドアを思い出す。

「となると、それっぽいものを探すのが優先か。しかし困ったね。あいつらがどこから湧いて出てきてるかなんて情報はない。策はあるのかい、レン?」

「……ないわね」

情報がなさすぎる今は、後手後手になってしまう。どうにかならぬいかしら……

「あの、私達は氷漬けになったのしか見てないのですが、どんな生物(せいぶつ) なのですか?」

「確かに気になるな。レンがそんなに危険視しているということは、凄惨な害がありそうだけど……」



めぐみんとカズマは私たちの会話に興味を持ったらしい。

「なんだなんだ？ あちしの噂をしてるのか？」

「そうそう、こんな生物（なまもの）……って、なんであんたがここにいるのよお!!」

噂をしていればなんとやら。すぐにどこにでも現れる。

「いやあ、なーんか七夜っちに違和感を覚えましてね。どうも、あたしたちとの熱き友情物語を忘れてるようじゃないか。まあ、説明は省くとして、あちしたちの目的はこの世界の乗っ取りよお！ で、どうよお、七夜くん。あちしたちに手を貸すなら世界の半分をくれてやるぜえ？」

なにそのドラ○エ。

「断らせてもらう。生憎俺は、そういうのに興味はなくてね」

「即答いただきました！ 仕方がない。我らがNECOだけでことをなす他あるまい」

呆れた……

つまり、七夜に世界征服を手伝ってもらう為に志貴を反転させたのね……

志貴なら絶対断るだろうけど、七夜なら、と踏んだのでしようけど……

「世界征服が目的だったのね……てつきりまたヒロイン乗っ取り計画でもするんじゃないかと思っただわ……」

「バカを言うんじゃないよ、ツンデレエ。そもそも、この小説にヒロインとかいましたっけ？ 駄女神と爆裂娘とドMですぜ？ カズマたちの苦労もわかりますよ、ホント……」

どこからか、プチツという音が聞こえた気がした。

「頭にきました。撃つていいですか？ この生物（なまもの）を焼いてもいいですか？」

「落ち着きなさいめぐみん。こんな所で撃ったら、負債がさらに増えることになるだけよ」

めぐみんを止める。撃ちたくなくなるのは分かるけど、場所を考えて欲しいところね。

「言いたいことはそれだけねっ!! ゴツドブロウツ!!」

「ヌワアアア!! あちしの……あちしの美貌が!! 良くもやってくれたな、駄女神イ! これでも喰らうがいい!」

さすが女神様。こんなミジンコみたいな生物にも容赦がない。だけど、結構派手にくらっていたのに、全くダメージを受けていないブサイク猫。お返しとばかりに目からビームを放った。

「なによそれ! 反則でしょ!!」

「我々猫27キヤットに反則もクソもないのだ。どうよ、この強さ。憧れちやう? 痺れちやう?」

「どうしよう、カズマ! こいつら、強すぎるわ!」

アクアと共にカズマの方を見る。そのカズマはというと――

「分かってくれるか……俺は……俺は……」

「皆まで言うな、兄弟。まあ、飲め。言いたいことはよおくわかる。そんなパーティー抜けて、あちしらと来たらどうだ?」

仲良く飲んでいた。

「そうしたいのは山々だけど、俺も一応このパーティーのリーダーだ。第一、楽しんでるしな。こういうのも悪くないって思い始めたよ……」

「何そんなところで語り始めてるのよ……」

ブサイク猫を再び凍らせ、砕く。

「兄弟いいいい!!? レン、なんてことするんだ!!」

「なんてことするんだ、じゃないわよ! 何馴染んでるの? 百歩譲って、常識人だと思っていた私が馬鹿だったわ……」

「さて! 俺は常識人だろ!!」

周りの目が急に冷たくなる。

「ちくしょう……何故こうなった……」

アクアやめぐみんをカエルの粘液でベトベトにする。クリスマスやめぐみんのパンツを強奪する。etc…

日頃の行いのせいでしょ……

## レンと不思議なNECO3

「おっす、元気かさっちゃん。——ところで、おまえから不幸の匂いがする」

もう、ギルドに居た気が狂いそうだったから、外に避難した。あの場にいたら、ブサイク猫が量産されてしまう。

——と想像していたのだけれど、どうも私に逃げ場というものは無いらしい。

街にくり出て見れば、さつきがブサイク猫に絡まれている様子。面白そうなので少しだけ様子を見てみよう。

「ひ……い……だ、誰ですか、そんな失礼かつ本当のコト言う人は——！  
……あれ？」

初めて見るのに、なんかどこかで会った気がする人だ……」

「うむ、月箱ではお世話になった。格闘デビューも同期だし、貴方とは他人の気がいたしません。惜しむらくはネコ属性が皆無なところか。足りねえよ、さっちゃん」

なんか、あそことてもメタいわね……

「は、はあ……あの、そろそろ行ってもいいですか？」

「いいよー。なんかSOSサインを受け取ったのにやが、さっちゃんじゃごめんさい。なんつーか、ネコにも覆せぬ運命というものがある」

確かにあの子の運命は過酷なものだ。いつまで経ってもルートが作られないし。お祭りディスクに入れられるはずだったに、これも放置。まさに、可哀想な子……

「ネコさんに断言されるわたしの不幸……！ あ、でも、頑張っていればいつかヒロインにしてもらえるって誰かが言ってたよ……？」

「にやにやにや、そりゃ聖杯でも叶わぬ望み。でもまあ、その建気さがさっちゃんのイイトコロ。ワタクシ、嫉妬（かんどう）のあまり我を忘れそうです」

菌糸類、今何処ぞの人理修復に忙しいからね。あら、これもメタ発言かしら。

「きゃー、逆ギレキヤット!? 違う、

その漢字はかんどうつて読まないからー!」

さつきに襲いかかるブサイク猫。しかし、さつきは思いつきりそれを殴りつける。

「あわわわわ……ついやっちゃったけど、大丈夫なのかな……」

「さすがはさっちゃん……容赦ねえ……」

うつ伏せになったブサイク猫は顔を上げる。さつきぶん殴られたはずなのにピカピカだ。あの再生能力だけは、認めないとね……

それにしても、困ったわね……

あのナマモノは勝ちはしないけど、負けもしない。厄介すぎる。

「おうおう、SOS信号を出してたのはお前か、ツンデレ」

「ええ、出してるわよ。あんた達のせいだねっ!!」

もうイヤ……本当にもうイヤ……なんで私ばかりこんな目に遭わなければいけないの……?」

「あ、レンさん!! このネコさんたちは何なんですかつ!!」

私に気づいたさつきが話しかけてくる。

「私に聞かれてもわからないわよっ! むしろ私が聞きたいわっ!!」

「こっちも逆ギレキヤット!」

「あら、あいつらと同じ表現とか、死にたいのかしら?」

つい右手から冷気が漏れる。

「うそうそ!! 冗談です!!」

「おやおや、レン。そんなところで休憩かい?」

「七夜……そういうあんたは?」

「なに、暇つぶしだよ。あそこにおいてもネコしか来ないのでね。ところで、そこのお嬢さん。俺とデートなんてどうだい?」

でたわね、七夜のたらし癖。まあ、本人にはそんな気は全くないというのは分かっているのだけれど。

「おおお、お嬢さん!?! ししし、志貴君、どうしたのっ!?!」

「確かに俺は志貴だが、フルネームで呼ばれるととたんに怪しくなる。それで、どうだい、吸血鬼さん?」

不敵な笑みを浮かべる七夜志貴。

「さつき、やめておきなさい。あれの望むのは殺し合いよ。あなたの望む結果にはならないわ」

それがあいつの根本なのだから……

「え……えっ!?! 殺し合いっ!?! なんでっ!?!」

「あいつは七夜志貴。遠野志貴の使われていない部分よ。志貴であることは変わりないけど、無視するに限るわよ」

「そ、そうだね……」

そうは言いつつ、残念そうにするさつき。

「だそうよ、七夜。こんなところでも片思いなんて惨めね」

「そうでもないさ。どこかの素直になれない夢魔さんよりは百倍マシだと思いがね」

やれやれ、とオーバーなりアクションをする七夜。

「へえ……それって誰のことかしら?」

「さてね。俺は振られた腹いせでもしてくるとするさ」

そう言つて、七夜はブサイク猫達を斬りながらどこかに去つていった。

それにしても、本当に手のつけられないことになってきている。ブサイク猫の数は明らかに増えているし、このままではアクセルの街が潰れてしまいかねない。

早い段階でブサイク猫達がこちら側に来ている手段を見つけなければ、本当にまずいことになる。

「さつき、店の方はどうなってるの?」

教授がなにか手掛かりを掴めてたらしいのだけれど……

「あ、そうだ! レンさんと呼んでくるようにネロさんが!」

「早く言いなさい! 行くわよ!!」

ところ変わって、ウィズの店。

そこには、椅子に腰掛け、お茶をしている二人のカオス。一方はネロ・カオス。私のよく知る教授だ。テーブルを挟み、教授の正面に座っているもう一人……いや、もう一匹のカオス。

「ふむ、なかなかいいミルクだ」

ティーカップを置く、ネコ・カオス。

「ふぎけないでっ!! なんて、あんたまでこっちにいるのよっ!!」

「吾輩が知ったことではない。既に宴は始まっているのだ。もはや、この最凶を止めるすべなどない」

神は非情だった。神様が目の前にいるなら本気で殴りたい気分だ。

あ、女神なら身近にいたわね。今度殴っておきましょう。

「で、教授。私に何か用かしら?」

「それがだな……非常に言い難いのだが、この元凶は我が店の店主と  
いうことだそうだ」

「……はっ!」

意味がわからない。ウイズが黒幕?

リッチーだけど、いいやつだと思っただけに見逃していたのに、恩を仇で返すの? いいわ、やってやるわ。骨の髄まで氷漬けにしてあげるわ……

「その話、詳しく聞いてもいいかしら?」

「勿論だとも。まず、事の始まりだが——」

「ち、ちよつと待った。何であんたが協力的なわけ?」

「他の猫達はこの世界を征服するなどほざいているが、実際問題無理だし? 吾輩は無理なことほしないタイプなわけ」

なんかこのネコ、相当ドライね……

「あ、そう……」

「それで、詳しい話だが、人外のローブを着た、ウエーブのかかった茶髪の女性に呼び出されたのよ。呼び出された後は好きにしているですよ、なんて言うから他のNECO達は征服をしようとしているわけだ」

聞いた限り、確かにウイズの容姿に当てはまる。

「で、その女性はどこにいるの?」

「動いていないのであるなら、この街を出たところにいるはずである」

「さつき、ウイズを探しに行くわよ……」

後日聞いた話だけど、この時の私の顔は相当怖かったらしい。

ネコ・カオスの言った通り、アクセルを出てすぐの所にウイズはいた。

右手には、棒状の何か。棒の先は肉球になっている。魔法のステッキというと、そう見えないことは無い。

「ウイズ、そのステッキは何?」

「聞いてください、レンさん!! これ、凄いですよ! ほら、こうやると——」

ウイズが手に持っていたステッキを振ると、ボン、と音を立て、煙の中からブサイク猫が出てきた。

私は反射的にそれを氷漬けにし、砕く。

「ああ!! なんてことをつ!! 妖精さんたちにはなんの罪もないのにつ!!」

「アイツらには罪しかないわよつ! それとも、ウイズ? あなたが代わりにその罪を負うの?」

全身から冷気が漏れ出す。周りの気温が下がったのか、さつきの息は白くなる。

「ちよつと、レンさん!? それ、冗談じゃすみませんからつ!!」

「生憎と、私は冗談が嫌いよ?」

「怖え、キれた白猫超怖え」

「うるさいわよ、少し黙っててもらえる?」

「ていうか誰だ誰だ? ウイズの姉さんの場所をこいつらに教えたのは?」

「黒い方のあなただけ?」

「あちしのパチモン……この借りは高くつくぜえ……」

「とりあえず、ウイズ。そのステッキ、渡してもらおうかしら?」

「い、嫌ですう! 高かったんですから!!」

この貧乏店主。どうしてこうも不要なものを買ってくるのかが気になるところである。

「いいから寄越しなさい! って、届かないでしょうがっ!」

ウイズはステッキを高くあげる。奪おうとするけれど、身長差で届かない……

「おねがいしますう！ 何でもしますからこれだけはあ!!」

「分かったわよ。いくらで買ったの？ それ」

「50万エリスですけど……」

この瞬間。私の中で、ウィズは馬鹿であるということが決定した。何でこんな得体の知れないステッキなんかそんな大金を叩けるのだろうか……？

「分かったわ……100万エリスよ。それでいいでしょう？」

ウィズを納得させるにはこの方法しかない。少し痛手ではあるけれど、以前のキャベツ狩りで割と稼いでいるから、問題は無い……はずだ。

「いいんですかっ!?!」

そういうことで、ウィズからステッキを受け取り、へし折る。100万エリスを

その行為は半ば適当だったのだけれど、効果はあったようで、ブサイク猫達は次第に透明になり、来てえていった。

これで、事件解決。ギルドに戻った時には、志貴は遠野志貴に戻っており、ここ数時間の記憶が無くなっていたらしい。

最後に、私は軽くアクアに氷の礫を落としておいた。もちろん、理不尽すぎる攻撃に納得していないようだったため、上司にでも渡しおいて、とだけ言ってみた。

後ろから気持ち悪い視線を感じたのは気のせいでしょう……



## スキルを求めて

「来たか、白猫お！」

「何であんたがまだいるのよ!!!」

「ストツプにや!! もう私目にはストツクがありません。同じ猫の好でここは手を引いてはくれないかにやー?」

レンを連れてウイズの店に行ってみると、いました。生物とかいて、なまものと読む生物が。

「はあ? ストツク? いいじゃない、あんた達をここで滅せられるなら本望よ」

レンは戦闘態勢に入る。

「まてまて、ここはウイズの店だ。それに、あのエプロン。どうやら、ここでバイトをしているみたいだぞ」

NECOが着ているのは、ウイズ魔道具店

と日本語で書かれたエプロン。現地人に読めるかどうかは謎である。

「この猫、レンが片付けたって言ってなかったか?」

「ええ、そのはずなんだけど……」

「どうやら、1匹だけ残ってしまったみたい……と呟くレン。猫なのに鳥肌が立っている模様である。」

「まあ、そういうことなので、店員をいじめないで下さい。あちしに手を出したら、店長が黙ってません」

「なんか、相当強気だな、この生物。」

「あ、志貴さん。いらっしやいませ」

奥から、ウイズさんが出てくる。

「今日はどのようなものをお探しですか?」

「いや、俺が用があるってわけじゃなくて……」

「悪いウイズ、俺の用なんだ」

俺の後ろから顔を出すカズマ君。

「カズマ? 女神の私がいるのに、リッチーの店に来たっていうの?」

「ふざけてるの? 死にたいの?」

カズマ君の後ろから顔を出す駄女神ことアクア。彼女、相当不服なようである。

「お前は黙ってろ。だから連れてきたくなかったんだ……」

頭を抱えるカズマ君。まあ、予想はできたことだ。いつもなら、留番でもしていたのだろうが、どうやら男2人+1匹で美味しいものでも食べると思っただらしく、付いてきたらしい。

「そういうえば、さつきとネロさんは？」

「あの二人なら商品の仕入れに行っていますよ。あと数日は帰らないと思います。私が行こうとしたのですが、止められちゃって……」

なるほど……あの二人がこの赤字を阻止しているということか……

「なにになに？ やつぱり、志貴ってあの吸血鬼のことが好きなの？」

やはり駄女神。変なところに食いついてくる。

「馬鹿なこと言うな。俺には決まった人間がいるんだ。おいそれと、他の子を好きになるわけがないだろう」

「ヒュー、言うわね。どつかのヒキニートとは大違いだわ。プークスクス」

何気にカズマ君を貶すアクア。

「お前は黙つとれ!! んで、ウイズ。本題だが、ウイズのスキルを教えたい欲しいんだ」

「はあっ?! リッチーの店に来るだけじゃ飽き足らず、リッチーにスキルの教えを乞おうっての？ この邪教徒め!!」

「うっせー! リッチーのスキルなんてめったに手に入るものじゃないんだからいいだろうが! んで、どうだウイズ？」

「私は構いませんけど、どんなものがいいですか？」

ウイズは悩むことなく承諾する。それでいいのか、リッチー。「どんなのか……どんなスキルがあるんだ？」

「ええっと、相手を呪い殺したり、氷漬けにしたりでしょうか……?」  
「色々ハードだな!? しかしそれは、志貴さんとレンで事足りるな。他にもっとソフトなのはないのか？」

口には出さないが、どういう意味だ? 後で問い詰める必要がある

そうだ。

「それなら、ドレインタッチなんてどうでしょう？ これは、標的から魔力や体力を奪って他人に分け与えることも出来るんです」

「お、それ良さそうだな。教えて欲しい」

「どうやら、決定したらしい。」

「ええっと、見せればいいんですけどよね？ あの、志貴さん、手を貸してもらっても？」

「ん？ ああ」

右手を差し出すと、ウイズは手を握る。

「ドレインタッチは、その名の通り相手との接触が必要です」

ほんの少しだけ、力が持っていていかれる感覚がした。

「こんなところですか。どうでしょう？」

「ばっちりだ！ サンキュー、ウイズ」

ということ、カズマ君は無事スキルを入手。何事もなくてよかった。

「ウイズさん！ クエストの依頼があるんですが!!」

一人の男が店に入ってきた。

これは、なにか厄介事が起こりそうである。

お前ん家、おっばけやーしきー！

「ここかあ」

俺達が案内されたのは、大きな屋敷であった。

「悪くないわ！ この私が住むのに相応しいんじゃないかしら！」

はしゃぐ阿呆。なんでこんなに偉そうなのだろうか。

「元はある貴族の別荘だったらしいですね」

これは、大家さんの受け売りである。めぐみもなんだか嬉しそうである。

「とある貴族ね。しかし、森の洋館といい、こういう建物多いな」

「そうね。あの時はさつきがこちら側に来ているとは思っていなかったわ」

あれは、奇跡に近かった。

「しかし、除霊の報酬としてここに住んでいいとは太っ腹な大家さんだな」

そう。今回の以来は除霊である。その報酬として、大きな屋敷を貰うことになったのである。ウイズさんから依頼を横取りしたというのは、それはそれだ。

「大家さんが言うには払っても払ってもすぐに霊が現れるらしいぞ」

「それはかなり厄介だね……」

少しだけ、身震いがした。

「ん？ 志貴さんはお化けとかダメなんですか？」

カズマ君は不思議そうに尋ねてくる。

「どちらかと言えば、苦手だね。ゾンビとかなら耐性はあるんだけど、実体のないものは得意ではないかな……」

そういえば、霊って点や線は見えるのだろうか？ 見てみればわかるか。

「任せなさいよ！ 私は対アンデッドのエキスパートよ！」

そういえば、アクアは女神様だったか。日頃の行いのせいで完璧に忘れていた。

「見える、見えるわ！この屋敷には貴族が遊び半分で手を出したメイドとの間にできた子供、その隠し子が幽閉されていた様ね。元々身体の弱かった貴族の男は病死、隠し子の母親のメイドも行方知れず。この屋敷に一人残された少女はやがて若くして父親と同じ病に伏して――」

なにか壮大な解説をしているが、放置だ放置。

「ふーっ……」

「これで一通り掃除も終わったな」

日は暮れたが、どうにかこうにかで屋敷の掃除はだいたい終わった。

「それにしても、俺までよかったのかい？」

「何言ってるんですか。志貴さんは仲間じゃないですか」

「うん。そう言っつて貰えると助かるヨ」

仲間と言っつて貰えるのは嬉しいのだが、何故か引つかかるものがあった。

「なんで棒読みなんですか!？」

「あはは、それじゃあ、俺はこの屋敷を探索してくるよ」

誤魔化して、部屋を出る。早く1人になりたかったのだ。その理由は、この屋敷が――

「似てるな……」

「そうね。貴方が住むには贅沢……いえ、地獄かしらね？　まさか宛てがわれた部屋の位置まで同じなんて、お笑いものね」

レンがニヒルに笑いながら姿を現す。

この屋敷、遠野邸と全く間取りが同じなのだ。おまけといわんばかりに、離れまでついている。

「ああ、全くだ。こちらの世界でも同じような屋敷に住むなんて、皮肉だよ」

「それで？　どうして庭なんかに来たの？」

レンは分かっつていて聞いているようだ。

「さて、ね」

空を見上げ、心臓のあたりを強く掴む。今宵は月が綺麗だ。あの日

もこんな日だった。あいつは今、元気でやっているだろうか。

「ふうん。ま、いいわ。聞かないであげる」

「そりや助かるよ」

きつと、お前のところに俺は戻ろう。その時まで、待っていてくれ。

これは、誓い。その誓いは俺が彼女に会うまで消えることは無い。

「それじゃ、私は離れでも貰おうかしら」

「ん？ レンも部屋を貰うのか？」

それは意外だった。てつきり今まで通り、俺の部屋で寝るのかと思っていた。

「そりやあね。どこの鬼畜と一緒にいたらいつ襲われるかわからないんだもの」

「それは俺のことを言ってるのか？」

「あら、あなた以外に誰が居て？ ま、逃げ場がなくなったら上げてあげてもいいわよ？ 仕方なく、仕方なくだからね!？」

ホント、レンってツンデレだよなあ……

本人に言ったら凍らせられかねないけど……

「はわあああああああああああつー!」

そうこうしていると、屋敷の方から叫び声が聞こえた。

「何だ……?」

「さあ、あの女神様のようだけど、何かあったんじゃないの？」

何か、だと……? この屋敷にはもともと除霊が目的で来たのだ。嫌な予感がする。

「いくぞ、レン」

「あの女神様に限って大事はないと思うけど、分かったわ」

大急ぎでアクアの部屋に向かう。途中でカズマ君とも合流する。

「何があった!？」

「かじゅまあ……しきい……」

アクアは泣いていた。一升瓶をもって……

「これは大事に取っておいた凄く高いお酒なのよ。お風呂から上がったらゆっくりちびちび大事に飲もうと楽しみにしてたの……それが私が部屋に帰ってきたら見てのとおり空だったのよおおお!」

骨折り損のくたびれもうけとはこのことである。心配して損した。「そうか、じゃあおやすみ。また明日な」

俺とカズマ君は部屋から出て、ため息をつく。

「これは悪霊の仕業よ！　ちよつとこの屋敷を探索して目につく霊をしばき回してくるわ！　ターンアンデッド！　ターンアンデッド！　ターンアンデッド！　ターンアンデッド！　花鳥風月！　ターンアンデッド！」  
駄女神は放っておいて、寝るとしよう。アクアがやるきになってるのなら、明日の朝には除霊できていることだろう。

ベッドに横になってみると、ふと、誰かの視線を感じたような気がした。

俺は起きあがり、あたりを見渡す。が、何もいない。

「なんだ……気のせいか……？　おい、レン？　なんかの嫌がらせか？」

返事はない。そういえば、レンは離れにいるんだったか。

じゃあこの視線は一体……

「……っ!？」

目を開けると、そこには人形が浮かんでいた。なるほど、これは怖い。

などと分析している俺だったが、体は本気で逃げ出していた。

「なんだ、なんなんだあれ?!　浮いてたぞ？　魔法か？　マジか？」

いや、ここ魔法の世界か」

頭が回らない。マジでどうなってるんだ……？

後ろを見ると、大量の人形が追ってきている。真に迫るといふのは、こういうことなのだろう。

「ちい、仕方ないか!」

ナイフを抜き、人形の死を視る。

「ここだ。灰燼と帰せ!」

【閃鞘・八点衝】

全ての人形の線を斬る。すると、粉々になった、人形がバラバラと音を立って床に落ちていく。

「なんだったんだ……？」

「あ、いたいた。おーい、しきー」

人形を倒しながら屋敷をさ迷っていると、アクアが手を振りながら近づいてきた。どうやら、ダクネスも一緒らしい。

「あとは、この部屋だけね。一応ノックしておきましょう」

変に律儀な女神様。そして――

「かかってこいや悪霊がああああ！ 後でウチの狂犬女神けしかけてやんぞこらああああ！」

思いつきり開いた扉に吹っ飛ばされたのであった。

後日談、というか今回のオチだけど、壮大に説明していたあのアクアの物語は事実だったらしく、寂しがっていた女の子が俺たちを驚かせていたらしい。

ちなみに、霊退治の報酬もでたのだが、そもそも、その霊を寄せ付ける原因となったのがアクアだったらしく、辞退することとなったらしい。

「その落とし方、使っても大丈夫なの？」

「ダメだろうけど、1回くらい大目に見てくれるだろ」



## 男なら、推して知るべし

本日は日がな一日、特にやることも無く散歩にあけくれる。やること自体はクエストやら、バイトやらはやることもあるのだが、今日一日は暇という時間をめいっぱい満喫させてもらおう。

「こちらあ、NECCOFFEEでございますにゃ」

店員が運んできた黒い液体を口に運ぶ。この、独特な風味、どこか煮干を思わせる――

「ぶっ――!?! なんだこれは!?!」

塩っ辛い。そして、磯臭い。こんな飲み物が存在しているとは、恐るべしアクセル。

「やつぱ、醤油に煮干を入れただけじゃダメだったかにや?」

このNECCO、悪びれる風もなく首を傾げる。

「なんてものを飲ませるんだ!?!」

ありえない。コーヒーに見立てて、醤油をコーヒーカップに注ぐなんてありえない。煮干を添える意味がわからない。

「いやあ、軽いジョークですよ旦那」

「冗談が冗談になってないぞ!?! 醤油をそのまま飲むとすっごく辛いんだからな!?!」

おかげで、すごく気分が悪い。

「まさか、匂いで気付かずそのまま飲んでしまうとはにやあ……志貴っち、こっちに來てからドジっ子属性でも追加したのかい?」

「なんだその不名誉な属性は!?!」

レンがこのナマモノを毛嫌いする理由がわかった気がする。これは、殺人衝動がなくてもやってしまっそうだ。

「あはは……志貴君、今日はどうしたの?」

さつきが苦笑いをしながら水を運んできてくれる。

「特に今日はやることがないから、友人の顔を拝みに來たんだよ。それに、ウイズさんにも用があったしな」

「友人!?! 私の事なのかな……かな……!?!」

さつきは顔を赤くしてなにか呟いているようだが、よく聞き取れな

かった。

「私に用というのは？」

奥からウイズさんが出てくる。本日、ネロさんと、黒いNECOは買い出しに行っているようである。

「ああ、最近ゴタゴタしていて忘れていたけど、魔王の幹部についてウイズさんに聞いたら何かわかるかもしれないと思って……」

当初の目的であった、魔王の討伐。その幹部について、この魔道具屋の店主に聞けば何かかわかると聞いたことを思い出したのだった。

ウイズさんから話が聞けたら、一歩前進することが出来るだろう。「それでしたら、私も幹部ですよ？」

その言葉を聞いた瞬間、条件反射で椅子から立ち上がる。

「あ、あのお……出来たら、メガネをつけてナイフを下ろして貰えると嬉しいんですけど……」

どうやら、臨戦態勢になってしまっていたようだ。ウイズさんにも、なにか理由があるのかもしれない。こんないい人——いや、アンデッドか……が無意味にそんなことをしているとは思いたくはない。「すみません……だけど、とても大切なことなんです。話してもらってもいいですか？」

「はい。構いませんよ」

そういう訳で、話を聞いた。ウイズさんは魔王軍の幹部であるということは紛れもない事実であった。しかし、それは魔王軍の城の結界の維持を頼まれているという1点に関してのみである。魔王の結界をとくためには、幹部の全員を倒さないといけないらしいが、そこはアクアの力でなんとでもなりそうであった。最悪、結界を殺せばいい。

「ごめん、ウイズさん。何も聞かずにナイフを向けてしまって……」

「いえ、私が幹部というは紛れもない事実ですから。お気になさらないでください」

ああ……なんていい人なんだ。こんな身近に女神はいたらしい。

「それじゃあ、話も聞けたし俺はお暇させてもらおうよ」

「またいつでもいらっしやってください」

ニコニコと笑顔を向けてくれるウイズさん。本当に、癒される。「あらあら、ウイズに鼻の下なんか伸ばしちやつて。妹に殺されても知らないわよ?」

「なっ!? レン、いつからそこに!?」

この使い魔、本当に急に現れる。

「たつたさつきよ。それにしても、だらけ過ぎなんじゃなくて?」

「いいんだよ。オンとオフは重要だろ?」

「そこは認めてあげるけど、あんまりだらしないことはしないでよね」「悪かったよ」

しばらくレンと歩いていると、挙動不審なカズマ君その他を見つける。

「あれ、カズマ君だよな?」

「ええ、そう見たいね。ほかのパーティーの男達とつるんでいるようにだけど、なんか面白そうね」

レンはニヤリと笑う。これは、なにか企んでいる様子。

「つけるわよ、志貴」

俺に否定権というものは存在していないようである。

「店に入っっていったな……」

カズマ君達御一行は、一件の建物に入っっていった。何やら、キヨロキヨロと挙動不審でとても怪しい。

「あそこは……なるほどね……」

レンはため息をつく。レンはあそこがなんかのか知っっているのだろうか。

「レンはあそこが何か知っっているのか?」

「知らないわよ。だけど、何がいるかというのはだいたいわかるわ。そして、何をする場所かということも推測は可能よ」

呆れたような返事が返っってくる。それは、果たして察しの悪い俺へなのか、店に入っっていった男達へなのかはわからない。

「へえ、それじゃ、何をするところなんだよ?」

「あまり口にしたくはないわ」

……まで来て、レンは口を噤む。

「はい？」

「だから、口にしたくないと言ったの。レディーに言わせる気？」  
なんだか、苛立っている様子。

俺、何かしたか？

「いや、そんな事言われてもな……ヒント位くれないか？」

「貴方ねえ……分かったわ。あそこには淫魔が居るわ。それも大勢ね。あとは、想像しなさい」

レンは大きくため息をついたあと、ヒントをくれた。

「淫魔？ サキュバスとか、そういう奴か？」

「そ。もう分かったでしょ？」

淫魔。古代ローマ神話とキリスト教の悪魔の一つ。夢の中に現れて性交を行うとされる下級の悪魔のことだったか。

「ああ、カズマ君には申し訳ないことをした……」

どうやら俺達は、見てはいけないものを見てしまったらしい。

しかし――

「淫魔って、夢魔の別称じゃなかったか？」

レンは夢魔である。確か、ネロさんがそんなことを言っていた気がする。

「なっ!? 私を淫らなアイツらと一緒にしないでもらえる？ 凍らすわよっ。」

レンの鋭い眼差しが俺を貫く。どうやら、夢魔と淫魔は違うらしい。

その夜。

「これは蟹か？」

「ああ、私の実家を送ってきてくれたんだ」

なるほど、それはありがたい。こんな世界に来てまで蟹を食べられるとは思ってもしなかった。

一人に一鍋。なんとという贅沢だろう。

「ああ……やつとカニが食べられるのね……」

レンはどこか感傷に浸っている。何か、蟹に思い出でもあるのだろう

うか？

「うん、これこれ、この真っ赤な甲殻類がなくっちゃ、何もはじまらな  
——」

「ガリガリ。久しぶりに食べたけど、やっぱり筋張ってるっつーか、堅  
いつつーか、なんかまずいつつーか……」

気づけば、レンの蟹鍋が奪われていました。どこかはともなく現れ  
た、NECOの手によって……

「返しなさい。今すぐ返しなさい、ブサイク猫。あと貴女、相変わらず  
カラごと食べてるから、それ」

暴れるかと思いきや、とても冷静なレン。

「およう。てつきりガン無視されるかと思ひ、大胆にも正面から食材  
を盗み食いしてみたのですが。にやんだ、今回も付き合いいいな、白  
いの」

「……ふん。諦めただけよ」

レンは諦めた表情でため息をつく。

「だって貴女相手につつまないでいるなんて不可能なもの。これか  
らは適当にあしらって、適当にリンチしてあげるって決めたの」

レンの言っていることは、今日の一連でよく理解できていた。多  
分、それが最適解なのだろう。

「そういうワケだから……ほら、さっさと表に出なさい。お望み通り  
戦ってあげるわ。満足したら自分の国に帰ってよね」

レンの周りに冷気が纏う。どうやら本気のようなのである。

「そ、ですか。でもにやー。そこまで分かり合えたのなら、お友達まで  
あと一步。二人で仲良く鍋つつこうぜ？」

そんなことを言いつつも、ガリガリと蟹を食べ続ける生物。蟹を食  
べる効果音でないことは確かである。

「だから、それがイヤだって言ってるの！ せつかくの鍋タイムを邪  
魔しないでちょうだ——って、ああ!? あんなにあつた赤いのが残り  
一匹に!？」

もはや、ナマモノに慈悲などなかった。

「んー……まずいにやあ。これが食材の王だとしたら、ふふふ、人類ど

もが今まで食べていたのは一体なんだったのか……んー、ところで口の中が血まみれになってきました」

さつき、レンも言ってたけど、さつきから殻ごと食べてるから。本来、そういう食べ方じゃないから……

なかなかグロイから……

「やめて、返して！ それ私の、私のカニなのに！ 絶対に許さない！！」

レンは涙目で生物を掴んで、表に出ていったのであった。

「……なんだったのだ？」

「きつと、妖精の仕業ですよ」

「そうね！ レンには悪いけど、食べちゃいましょ！」

「お前ら、鬼畜だな……」

女子達の反応に呆れるカズマ君。しかし、その手はどんどん進んでいる様子。鬼畜である。

「カズマ、ちよつと火を頂戴。いまからこれの美味しい飲み方を教えてあげるわ」

アクアの申し出に、カズマはティンダーを使う。どうやら、甲羅酒を作るらしい。

「ハア……」

アクアはできた甲羅酒を一口。とても幸せそうな顔をしている。やはり、美味しいのだろう。

「これはいけるな。確かにうまい」

アクアに続き、ダクネスも甲羅酒を口にする。

ついでに、俺も便乗させてもらう。

「確かに、これはなかなか——」

美味しい。その一言である。

「私にもくださいー！」

「ダメだ、子供のうちから飲むとパーになると聞くぞ」

めぐみんも俺たちに触発されたらしく、飲みたがるが、カズマ君に拒否されている。本当に、兄妹みたいである。

そして、そのカズマ君はというと——

「カズマ君、どうしたんだい？」

「どうやら、乗り気ではないように見える。甲羅酒だって、飲んでいない。いつもなら、ありえないだろう。」

「……うちから送られてきた物、口に合わなかったか？」

ダクネスはただ、心配そうにカズマ君を見る。

「いや蟹は凄く美味い。ただ昼に知り合いと飲んでもう飲めそうにな  
いんだ」

「……そうか」

ダクネスは純粋な顔で笑う。普段からは想像できない笑顔であつた。

そして、楽しい時間も過ぎ――

「それじゃ、ちよつと早いけど俺はもう寝るとするよ」

颯爽と、カズマ君は部屋を出ていったのであつた。

深夜。

『この曲者！ 出会え出会えー!!』

アクアの叫び声によつて、俺は起こされた。

「おい、アクア。何事だ？」

アクアとめぐみんの先には魔方阵に捕らわれた、サキュバスがいた。

「見て見て！ 私の結界に引つかかって身動き取れなくなった曲者が  
「アクアアアー!!」……」

そして、アクアの説明を遮るように、カズマ君もやってきた。

「こつちにも曲者がいた！」

タオル一丁の変態（カズマ君）がいました。その後ろからは、ダク  
ネスも来ている。

「誰が曲者だ！」

否定してあげることが難しいだろう。

「このサキュバス、結界に引つかかって動けなくなっていたの！  
きつとカズマか志貴を狙ってやって来たのね！」

その瞬間、全てを察した。つまり、このサキュバスはカズマ君に夢  
を見せるためにこの屋敷にやってきたのだろう。

「サクツと悪魔祓いしてあげるわ!」

「おとなしく滅されるがいい」

黒い顔で笑う、アクアとめぐみん。なんでこう、うちの女達はこうなのだろう。

「ニゲロ……」

さて、どうしたものかと考えていると、カズマ君がそう言った。その顔からは、漢の表情がみてとれた。覚悟は決まったらしい。

「その子はカズマの精気を狙って襲いに来た悪魔なのよ?」

「正気ですかカズマ?」

尚も、サキユバスを殺そうとする二人。カズマ君がそう決めたというのなら、俺も加勢するとしよう。

「おちつけ、二人とも。まだ実害は出ていないだろ。まずはだな——」

「今のカズマはサキユバスに魅了され操られている! 夢がどうか設定がこうとか口走っていたから間違いない!」

2人を落ち着かせようとしたところで、ダクネスが口を挟んでくる。

カズマ君が魅了されてるってなにそれ?

「おのれサキユバスめあんな辱めを……ぶっ殺してやる!」

顔を朱に染めたダクネスは普段言わないような暴言を吐く。

「どうやらカズマとはここで決着をつけないといけないようね……ア  
ンタをけちよんけちよんにした後でそのサキユバスに引導を渡し  
てあげるわ」

対立する、男と女。ちなみに俺は蚊帳の外。もう、勝手にしてくれ

……

「コイ……!」

そうして、戦争は始まったのであった。

俺はそそくさとサキユバスを逃がし、自分も離れに避難する。

「あら、こんな時間にどうしたのよ?」

「いや、屋敷にいと被害を蒙りそうだね……ほら、これ土産」

「これ……蟹鍋?」

「俺のあまりだけだな。食べてないだろ?」



「お、お礼なんて言わないんだからね？」

今日も、レンはツンデレのご様子。

『いいからニボシ食べろツンデレ』

どこかで、誰かがそんなことを言っていた気がした。